
アルティマイナ

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルティマイナ

【Nコード】

N3186Q

【作者名】

帆摘

【あらすじ】

あのととき、もっと弟の話を聞いていたら?!

突如召還された先は古代アトランティスの祖先達が移住したという異世界。そこで桜華を待っていたのは絶世の美女。

将来考古学者を目指す桜華は、王姉の思惑で貴重な考古学のお宝&資料と引き換えに王の妃選びに参加させられてしまう。

王宮では、裏表ありそうな美貌の王子、王子の子とされる可愛い2歳の姫を始め、一癖以上ある妃&側室候補の面々が。

さて、桜華の運命はどう紡がれて行くのか?

人物紹介

登場人物が多くなって来た事と、名前がややこしい？のでここで紹介しときます。また少しずつ加筆修正を行って行きます。少しネタばれが入るので、嫌な方は読み飛ばして下さい。

東紀 桜華…（18歳）ヒロイン的主人公。双子の弟千早の姉。先祖代続く神社の娘だが本人には何の力も無い・・・と思っている。出来の良い弟と、考古学者の両親がいる。趣味は幼い頃から続けた古武道。将来は自分も尊敬する両親のような考古学者になりたいと願っている。

東紀 千早…（18歳）神社の跡継ぎ。生まれた時から健康体そのものの姉と違いとても体が弱くしょっちゅう熱を出す。姉思いで、予知能力を持つ。

ティターニア…（24歳）時期アトランティスの王となるアクロテイヌスの姉。見かけはばんきゅっぽんで稀な美女だが中身は腹黒いところもある。桜華をアトランティスの民が信仰するトトス神が使わした娘として弟の妃候補として勧める。

アクロテイヌス…（19歳）現在は王子の立場だが、妃選びが終わったと同時に即位して王となる。ティターニアに似た超絶お色気美人顔だが姉よりも腹黒い所がありそう。何やら訳ありの娘がいる。

妃候補達

カリオペ アリタイア…（22歳）西の大貴族の娘。八大諸候のア

リタイア家の娘。金髪ゴージャスぽんきゅっぽん。気位が高い。

エウドラ クリユテ・（19歳）栗毛、茶色瞳の美少女。中位貴族ではあるが、実家は大きな商業を営んでいる。

クロエ メライナ…（18歳） 八大諸候の一つ、王家の呪術的な役割を代々保つ一族の娘で中東系美女。

ネオラ ニコラコプルプー…（16歳）青眼で金色、ふわふわの髪を持つ。あまり高位の貴族ではないが父親が野心家。昔姉が一人居たらしい。

オウラニア パナギョータ…（20歳）八大諸候の一つ、北の惣領姫と呼ばれ、その頭腦の高さには定評があるらしい。王子の幼馴染みでもある。

フィロメナ スマローナ…（18歳）肩迄延ばした赤めの髪をもつ大人しめな感じの少女。彼女の周りでは何かときな臭い事件が多発しているらしい。

[illegible]

ミルハハ…桜華付きの筆頭侍女。とても明るく気だての良い娘。下級貴族の娘。

アンブロシア…（出会った当時2歳11ヶ月）王子の娘で隠し姫と呼ばれる。

ジュニユファス…王子の幼馴染み。側近兼文官で、宰相見習い。と

でも頭の切れる男

ルワンド…王子の幼馴染み。筆頭騎士、普段は寡黙だが言う時には辛辣な言葉も・・・

アスリム…王子の幼馴染み、側近。

バシル…八大諸侯ポリヒウムニア家の現当主。桜華の義理の父となる。桜華に言わせるとかなりの狸爺らしい。

アドニス…桜華の義理の兄

プロローグ 夢の始め

東紀 桜華17歳、彼女の朝は毎朝5時半起きの鍛練から始まる。その日も武道の型を一通りやり終え、シャワーを浴びて部屋に戻ろうとすると、隣の部屋のふすまが静かに開いた。

「姉さん」

「千早、どうしたの？まだ寝てなくちゃ駄目よ？熱は下がったの？」矢継ぎ早に問いかける姉に苦笑しつつ、二卵性の双子の弟である千早はまぶしそうに桜華を見つめた。姉をこんな朝早くから呼び止めた事には意味がある。しかしそれをどう表現して良いのか分からないのだ。

「もしかして・・・また夢を見たの？」

「うん」さっきとは違い真剣な表情で姉を見据える。

「それは・・・私に関する事？」

「そうだと思うんだけど・・・」

珍しく言葉を濁す弟を促し部屋に入る。初夏とはいえ、まだまだ朝は寒い日が多い。弟は昔から予知夢と呼ばれるであろう類いの夢をたびたび見る事がある。しかもそれらの予知夢は一度として外れた事がない。見るものは家族に関係した物から、果ては世界情勢、災害迄様々だが、コントロールして見ている訳ではないらしい。

祖母に言わせれば、千早は先祖還りの血を濃く継いでいるようだ。その強すぎる力の為か、同じ双子だと言うのに千早は体が弱い。この神社を継ぐという意味においてはこれほど優秀な跡継ぎはいないのだが・・・。対する桜華はというと、予知夢を見たりと言う事はいつさい無いが妙に勘の良い所があり、そのおかげで今迄幾度かの危機を乗り越えてきている。

「ほら、カーディガンを羽織って。まだ学校に行く迄少し時間があるからどんな内容だったのか教えて？」

「うん・それが、なんて言ったらいいのかなあ。姉さんが古代ギリシャで着ていたようなトーガを着て神殿の中にいるんだ。その側に男の僕でも吃驚するような美形の男の人がいて、一瞬ただの夢なのかとも思ったんだけど・・。」とまたもや言葉を濁す。その男がやたらと姉を愛おしげに見ていてむかつ腹が立ったのはあえて言わないでおく。姉は夢の中でも相手を適当にあしらっているような感じだったのでホッとしたのも内緒。僕は筋金入りのシスコンなんだから。かといつてアブノーマルではない。ちゃんと姉を託せる相手がいたら、そのときには、2、3発殴らせてもらってから譲渡するつもりだ。

「はあ？私が古代ギリシャっぽい洋服をきて・・うんコスプレ？何、なんかのドッキリって事？あー、それとも母さん達に何か関係あるのかなあ？何にしても私がそういう格好を好んですとは思えないんだけど・・。」

「そうだよね・・」

桜華と千早の両親は揃って考古学者だ。1年のうちの半分は世界中を飛び回りやれあそこの遺跡がどうだ、新しい遺跡が見つかったなら諸手をあげて出て行くので、この神社に普段いるのは祖母を含めた3人と、お手伝いにくる鈴代さんぐらいなものだ。

「・・・」

千早は黙って姉の顔を見つめる。姉の桜華は身内の欲目を差し引いても美しい容姿をしている。一度も染めた事のない美しい黒髪と黒目がちで切れ長の大きな瞳、すっと通った鼻筋と、ふっくらと愛らしい唇。病弱な事もあり、なかなか学校にでる回数も多くはないが、校内で密かに桜華のファンクラブが多く存在しているのを知っている。中には邪な思いを抱いて姉に近づく男達もいるが、それらは姉

の、自分とは違った危機感からうまく避けられており、よしんば近づいたとしても、数多くの武道を物にしてきた姉の前に無惨に散るばかりだった。しかし今回の夢は・・自分の中でこれは実際に姉の上にかかるであろうと言う事とまたそれが避けがたいものである事が予感・・いや実感として感じる事ができる。

だが、それにしては納得のいかない要素が多かったのが気になる。あの夢でみた神殿や建物、そして人々は作り物の様には思えなかった。映画のロケとも考えたが、姉の性格からして、そんなものに自ら出るとは考えがたい。ではいったい何だというのか・・いくら考えてもあの奇妙な夢の感覚はするりと指の狭間からすり落ちて行く。もしかしたらこれが昔、大祖母様がおっしゃっていた姉の「運命」に関わりのある事なのだろうか？しばらくの間考え込んでいた僕の耳に唐突に言葉がなだれ込む。

「あ、あー、もうこんな時間?! やばい、いかなくちゃ。ね、千早その話は帰ってからゆっくり聞いわ。たぶん、そんなすぐ起こる未来の話って訳でもないんでしょ? じゃ、行ってくるから!」

そういつて姉は焦ったように隣の部屋に駆け込んだ。すぐに制服に着替えて鞆をもって家をでていく姉を窓から眺めながら俺はゆっくりと息を吐いた。

そう、確かに僕の見る予知夢は大抵すぐに起こることではない。2、3日先の事もあれば、1ヶ月、長くて半年ほど先の未来を見る事もある。今回の事も、そうすぐに何かが起こる訳ではないと甘く見ている事に僕は後から後悔することになる。

予感

授業が終わると桜華は帰り支度を始めた。いつもならば、もう少しゆっくりしていられるのだが、午前中に入ってきた母からのメールの為だ。

「東紀さん、今日は早いんだね。」隣の席に座る男子が話しかけてきた。

「ああ、うん。そうなんだ。今日はちょっと用事ができて」

「へえ・・どんな用事？って聞くのはやぶ蛇なのかな・・。」と聞こえるか聞こえないかの小さな声で男子生徒は呟き、桜華に微笑む。「そうか、じゃあ、今日は図書館の君が見られなくてみんな悲しむだろうね？」

なんの事かと桜華は首を傾げて男子生徒を見つめる。

見つめられた生徒は少し顔を赤くして一瞬気まずそうに目を泳がせると、「じゃあ、また明日ね」と声をかけた。

軽く手を挙げ出て行った美貌の彼女を見つめつつ、男子生徒は苦笑した。図書委員であるだけでなく、本人もよっぽど本が好きなのか、放課後よく、図書室の一角で本を読む彼女を密かに守る愛好会が存在する事など本人は気にもしないのだろう。

たとえ読んでいる本が、某オカルト雑誌、「ムー」であっても、彼女、いや、滅多に学校には顔を出さない双子の弟の千早も含めて彼らがそこに居るだけで、何者にも犯しがたい場を作り上げるのだ。

早足で駅へ向かいながら桜華は今日届いた母からのメールの内容を思い出し、ため息をついた。確か、ほとんど約1ヶ月ぶりに届いたメールだったが、内容はというと・・・「ハロー、桜華元気にしてる？千早はまた熱を出したんだって？千早にあんたの無駄に有り余った体力の100分の1でもあれば良かったんだけどねえ。まあそ

れはともかくとして、大至急手にいれたい資料があるのよ。悪いんだけど、県立図書館まで行って、PDFでファイル送ってもらえるかしら？詳細はお父さんからリストが送られてくるからよろしく！それじゃ、今日も元気で頑張るのよ？！おばあちゃまと鈴代さんによろしくねん＊c h u＊」

我が母ながら、毎日メールを送っているにも関わらず1ヶ月ぶりに帰ってきたメールがこれかとかびっくりするが、両親の子供に対する愛情が分からないほど馬鹿ではないし、子供でもない。両親が遺跡探索の傍ら、いつも千早の能力からくる体の弱さをなんとかできないかと各地で色んな物を探しては怪しい薬などを送ってきたりすし何より、桜華にとって、両親は憧れの存在でもある。

幼い頃から様々な遺跡やオーパーツなどの話を聞かされ、時には遺跡の発掘にもついて行き、その面白さにどっぷりとはまり込み、進路もこれまた考古学一本と決めずっと考古学の基礎から語学に至る迄英才教育を受けてきた。

将来は両親のような立派な考古学者に！と多少・・・いやかなりオタク度が高い知識を増し加えつつ今の桜華があった。

えっと・・・これで全部よね？父から送られてきたリストを再確認して、すべてのファイルを送り終わると桜華は窓の外を仰ぎ見た。

「雨・・・？」図書館に入る前は青空だったのが、今は薄暗く雲に覆われている。

今日の予報で、雨なんて言ってたかな・・・。

駅までそう遠い訳ではないので走って行こうと身を乗り出した瞬間、シャンシャンシャンと耳に聞き慣れない鈴の音が響く。慌てて回りを見回すが、突如起こった違和感に目を見開く。

前を通る車、行き交う人々、猫や鳩と言った動物迄すべてが色を失ったように停止していた。

「な・・・に・・・？」

周囲の静けさとは別に耳に鳴り響く鈴の音は高らかに速度を上げて行く。

現実ではあり得ないその状態に危機を抱きつつもあらがえない鈴の音がいつそう高く鳴り響いたとき、少女の意識と共にすべてが消え失せた。

王姉 1

朝の冷たい空気を吸い込みゆっくり吐き出しながら長年体に染み付いた武道の型を一心に紡いでいく。静寂なその一時がパチパチという手を叩く音によって遮られた。

「すごいです、桜華様！それは何か儀式の為のものなんですか？」

「ミルハ」桜華は声をかけてきた人物へとゆっくり目を向ける。「ごめん、もう一度ゆっくり言って？何の儀式って言ったの？」

声をかけられた少女ははっと気がついたように少し顔を赤くして口ごもる。

「ごめんなさい。桜華様、もうすっかり私たちの言葉を理解しておられるので興奮して早口になってしまいました。はい、ええと、それは何かの儀式の為の舞なのですか？」

「まだまだ勉強中よ。そうね、これは古武道の型の一つ・・・って言うってもわからないか。でも元々は神道の舞にも通じたものでもあるから儀式に関するものとも言えなくはないわ。ところでミルハ、何か用事があったって来たんじゃないの？」

「あ、そうです。すっかり忘れる所でした。ティターニア様が桜華様を呼んでくるようにと・・・きつといよいよですよ！」興奮して喋るミルハと並んで歩き出しながら桜華はこの世界に來た時の事を思い出していた。

水の流れる音がする・・・。

背中が冷たい・・・固い・・・これは何・・・？ 私には氣を失っていたのか・・・？

ゆっくりと瞼を開き、起き上がると、目に飛び込んできたのは緑の楽園と中央にある大きな噴水だった。あまりの美しさに自然と目を奪われたが、すぐに何かがおかしいと考えだす。そうだ、あのすべての時間が止まった瞬間の事を……。あんなにうるさく鳴り響いていた鈴の音はもう聞こえない。あるのはむせ返るような緑と流れる水の音。そして……。視線。

何人居るだろう……。4、5人、じっとこちらを伺っているのがわかる。それでも長年武道をやっているだけあってそういった気配には鋭くなっている。

今の所剣呑な気は向けられていない。何故自分がこんな所にいるのか、まずは聞いてみる必要がある、そう考えているうちに正面の緑の木々の奥にあった扉が静かに開き、ゆったりとしたトーガらしき衣装を纏った幾人かの人々が桜華に向かって歩いてきた。その中央にはこれ迄に見た事の無いような妖艶な美女がいる。

コスプレ……。？ここまで派手な舞台を用意してまでのドッキリ？彼らが到着するまでの間様々な事柄が頭の中を巡る。怖いと思う気持ちは不思議となかったが、それよりも興味の方が勝っていた。

桜華から数メートルのところまで謎の一团は立ち止まる。丁度両方向からお互いがよく見える位置だ。着ているもので判断するならば前列にいる男達は剣らしきものを下げている。後ろの美女の護衛といった風だ。もし何処か人様の住居？に家宅侵入してしまっているのだとしたら怪しまれるだろう。

格好そのものとしては、相手側の方が十分に怪しいが……。ふと何処の人達なのだろうかと考える。顔立ちは西洋人ぽいが、黒髪の者もいれば黒に近い瞳をもつものも居るようだ。

と、相手側の一人が向こうから何かを叫ぶ。

「ο σ δ ' ο ? ν κ α ? α ? τ ? ? ? π ' α」

「は・・・？」

「ο σ δ ' ο ? ν κ α ? α ? τ ? ? ? π ' α ν ? μ ? ν κ α τ η」

一番手前に居た男がもう一度何かを喋った。自慢ではないが、考古学者の卵としてある程度一般の言語には耳慣れているつもりだったが、まったく何を言っているのかわからない。

すぐに言葉が通じないと悟ったのか、手前に居た男が何やら美女の隣にいる男へと話しかけている。いったいなんだというのだ。まったくもって状況が理解できないことにいらだちを禁じ得ない。

その時、ずっと私を見つめていた中央の美女が突如私の方へ向かって歩幅を近づけてきた。後ろの男達が何かを叫んでいるが気にした風もなくついと私の目の前までくると何本もの細い金の輪がはまった腕を上げ、私のおとがいを優しくつかみ上げた。美しい翠の瞳に自分が映る。

「? ? ο ? δ ? τ ? π ρ ? τ α δ ι α σ τ ? τ η ν ? ρ ? σ α ν τ
ε」

いや、だから・・・わからないんだって。困った顔を見せると美女は優雅に微笑みぎゅっと私を抱きしめた。暖かい・・・。そのまま美女は私の手を引っ張って歩き出した。どうしよう・・・？まあ危険な感じはしないしそのままついていって状況を知るというのも手だろう。どうやらこの美女はある程度の権力者であることが、言葉はわからないが、彼らのやり取りを見ていると察せられる。

緑の楽園・・・と一瞬思ったほどに此処は緑が満ちあふれていた。そう、まるで現実のものでは無いように。でもこれは人工的なものだ。先ほどまで私が寝ていた場所は沢山の装飾が施された神殿のようだ

った。彼らが入ってきた扉の向こうには違った風景が広がっているのだろうか？

私は不謹慎かもしれないが何処かで自分の置かれた状況を楽しんでいる自分を笑いつつ、扉の向こうへと一歩を踏み出した。

王姉2

「あり得ない・・・なんなのここは？」

不安、期待、いやそれ以上の何かが自分の中で渦巻く。そこは、桜華の知る「現実」では考えられない空間だった。と同時に確信する。ここは自分が知っている世界ではないのだと。

そこはまさに物語りの中の世界だった。理想郷と言っても良い。年々緑を無くして行く地球と違ってここはなんと豊かな土壌なのだろう。もちろん今見ているものがすべてではないと理解しているが、言葉に出来ない感動にしばし瞠目する。

と、気遣うように隣の美女が桜華の制服の袖をひっぱる。

大丈夫だと言うように微笑んでみせると、彼女はもう一度桜華の手を握り直した。

しばらく歩くと何か乗り物のようなものが見えてきた。車と形態は良く似ているが、車輪がない。促されるままに乗ってみるといきなり車体が宙に浮かび滑るように走り出した。一体どういう原理で走っているのか興味が尽きない。

30分ほど走っただろうか、目の前に大きな城のような建物が見えてきた。それ迄の間、市街地のような場所も通ってきている。見た所、この車にしてもそうだが、自分の居た所と違った意味でかなり高度な文化が伺える。

それにしても気になるのが丁度市街地を通った時に見た看板の文字らしきものだ。私はソレを見た事があった。そう、親の手伝いで夏休みに行った海底遺跡から発掘された文字盤に描かれていた幾何学模様こそっくりだった。

そして王宮らしき城についた時、掲げてあった太陽を象った紋章を見て思わず私は口ずさんでいた。

「まさか・・アトランティス？」

その言葉に隣に座っていた美女が驚いたように反応した。まさかと流行る心を抑えつつ矢継ぎ早に質問したい事が山ほどあるというのに、これほど言葉が出来ない事にいらだちを覚えた事は無かった。その後、私は城の中の1室を与えられ、幾人もの家庭教師を付けられ、徹底的に言葉と文化を叩き込まれた。

好きこそ物の上手慣れと言う言葉通り、私は教えられるすべてを吸収し、約半年が経つ頃には、会話が成り立つぐらいになっていた。

そこで自分は沢山の信じられない事実を知る事になる・・。まず、この世界はかの伝説、おとぎ話だと思われていたアトランティスの民が祖先となった異世界の地である事、彼らがパラミシアと呼ばれる何らかの超人的な力を持っていた民であり、大陸の崩壊の危機に、異空間を繋げ、新しい地で豊かな文明を築いてきた事。

そして・・。何故私がこの異世界へと呼ばれたのか。これが一番不可思議な出来事だと思っているのだが、私をこの地へ呼んだのは、一番最初に神殿らしき場所（今ではそこが太陽の神殿と呼ばれる場所である事は知っている）で出会った美女、ティターニアだった。

ティターニア曰く、次期このアトランティスの王として立つ彼女のたった一人の弟の為に様々な占星術により一番相応しい妃となれる人物を召還しようとしていたそうだ。だが、その儀式を行った時には、誰も現れず失敗したかと思っていたのだが、二刻の時間の後、私が突如神殿に現れたという知らせを受け慌てて駆けつけたらしい。まさか彼女も祖先が昔住んでいたと言われるテラ（地球）から召還されるとは思ってもいなかったらしく、始め言葉が通じない私を兵達は訝しがったが、王姉には私が「そう」なのだとの確信があったらしく、丁寧にも王宮へと連れて行かれた訳だ。

正直この世界は私にとって宝の宝庫ではある。両親をもしここへ連れてきたならきっと私以上に舞い上がってしまうに違いない。しかしだ、この半年間一度として、残された家族の事を考えなかった日はない。言葉が通じたなら、すぐにでも返してもらおうと思っていた私に王姉ティターニアは優雅に微笑みながら言った。

「そうね、まさかテラからあの子の妃が召還されるとは思ってもみなかったけど、貴方は鈴の音に答えてこちらに渡ってきたのなら間違いないわ。あれは、選ばれた者にしか聞こえないのですもの。きっと時間がかかったのはこの世界にあの子の対となれる魂の持ち主が居なかったからね。」

「嫌・・あの、話を聞いて下さい。私の家族も心配していると思うし、返してもらえるとありがたいんですが」

「無理よ・・？」

「え？」

「だって、あれはもともと異世界から召還をする術ではなかったのよ。それなのに貴方は太陽神に選ばれてこの地へと導かれた・・。これはきつと運命なのよ！」

興奮するティターニアを横目に小さくため息をつく。この人は・・。全然人の話を聞いていない。実は、王姉に話を聞く前に家庭教師としてついていた神官に少しだが話を聞いていた。まだ難しくて理解できないところもあったのだが、要約すると、確かにティターニアの言う通り、彼ら神官が行った術は古から伝わる婚姻術の一つであり、召還術ではない。実際、召還術を使ったとしても今迄テラより人が召還された事は一度もないらしい。

つまり彼らの術に呼応する能力を持ち得る人物であるという事が前提であり、力をもたない一般人は呼びかけに答えることすらできな

いらしい。というか、呼びかけに答えたというが、あの鈴の音がそうらしいのだが、答えたつもりは一辺倒もないと言うのに・・・。

帰る方法を問うと、神官は静かに首を振った。だが、可能性は無い訳ではないらしい。向こうの世界、つまり地球にこちらとの世界を繋ぐ鍵と呼ばれる存在が居てなおかつ、相手側もかなりの能力を有していないと異界渡りの扉を開く事は難しいらしいのだが、神官曰く、昔アトランティスが滅んだ時、わずかだが他の大陸へ渡り、テラに残ることを選んだ古代人がいたらしい。鈴の音に導かれたということは、桜華の先祖はその残された血を引く者なのかもしれないとすれば、同じ血を引く双子の千早と何らかの形で繋がる事ができるかもしれないのだと。

王姉3

「桜華、桜華ったら聞いているの？」

「あ・・・はい、ティターニア様、えっと・・・何でしたっけ？」人の話を聞いていないのは自分もかと少し自嘲しつつ王姉に視線を戻す。少し色々と考えすぎて、途中からまったく話を聞いていなかったのだ。

「もう、桜華ったら、これは貴方と王妃の座を争う候補達のリストなのよ？しっかり覚えておかなくては駄目よ。」

「はあ・・・その候補の方々って何人いるんですか？」

「6人、そして貴方を含めて7人が王妃候補として推薦され後宮に入るわ。」

「・・・。6人も居るのなら私がわざわざ入る必要はないと思うんですが・・・。」

「駄目よ！前にも言ったと思うけど、私は弟には本当に幸せになってほしいと願っているの。その為にあの子にとって最善の相手を最高神であられる太陽神トトスに願って貴方が与えられたのですもの。」

桜華はもう何度目になるかわからないため息をついた。この話に至っては何度も同じ延長戦を巡り巡って両方が引く事がない。大体、桜華は結婚する意思など微塵もないし、どうにかして弟と繋がる事ができたら即刻帰る気満々なのだ。

それに、あの弟の事だ、自分が居なくなってから約半年経つが、大

人しく手をこまねいているはずは無い。体は弱いとは言え、頭脳と能力は希代の巫女と呼ばれた大祖母様のお墨付きだ。さすがにこんな異世界に姉が召還されたとは思ってはいないかもしれないが、いつになるかは分からないがそう遠くない未来に弟が必ず迎えにくる事を確信していた。となるとここでの滞在はいわばかりそめのお客さん、もしくは少し長めの留学だと思って限られた時間の中でできるだけ、この文化と貴重な考古学の遺産を勉強したいと思うのは桜華にとって自然な流れだったのだが、王姉も一歩も引く事がない。

最終的に提案してきた内容がこういったものだった。

「わかったわ、じゃあ、これから行われる王妃の選定に参加してくれるだけでもいいわ。もしあの子が桜華を選ばなかったら私も諦めるから。それに・・・、本宮にあるアトランティスの祖先の資料は此処の図書室にあるものとは比べ物にはならなくてよ？ 本当は王家の者以外には知る事ができない貴重なものもいくつかあるんだけど、良かったらそれを見せてあげることもできなくは・・・」

「行きます！ 参加するだけで良いんですね？」

「え・・・ええ、そうよ。」ティターニアは桜華の思わぬ意気込みに少々あきれつつもうなずいた。桜華とは違った意味でティターニアにもある確信があった。あの子はきつと桜華を選ぶことになるだろうと・・・。しかし、桜華にはまだ伝えていない事柄がいくつかある。この事は・・・桜華が実際に本宮で人から聞かされた事ではなく自分の目で見て、そして弟アクロティヌス本人を知ってほしい、彼を救ってほしい。それは自分の勝手な願い、そしてそれが簡単では無い事は千も承知だ。それでもかけるしか無いのだ・・・トトス神が選んだ娘に！

桜華が承諾してから準備は猛スピードで進められた。アトランティ

スの祖先達が移住してきたこの新しい地には当然アトランティスの民族しか居ない。その中で王族と、王家に連なる貴族がそれぞれの領地をまかされている。ティファーニア自身も王家に縁の深い貴族の元へ去年輿入れしたばかりだ。

アトランティスの王家は古くから絶対的な権力と力の象徴として君臨してきた。つまりその王の妃という立場はこの世界に生まれた女ならば喉から手がでるほど欲しくて仕方のないものなのだ。

他の候補者達はいずれも古くから名のある名家の令嬢ばかりだ。つまり彼らも王家に近い貴族であり、これから行われる選定会は言わばどの家がこれから王妃の身内として権威と力を手に入れるかというある意味戦争の縮図にもなっている有様だ。

今迄歴代の王妃候補達の中には選考中に何らかの原因で死亡したものの、不慮の事故として片付けられたものや、精神的におかしくなった娘などきな臭い逸話が後を絶たない。もちろん出来る限り桜華の周りには護衛をつけ、守るつもりでいるのだが、桜華はあっさりとそれを断った。

「大丈夫ですよ。どうせ私なんて選ばれないし、大人しく壁の花になっ
てますから、きつと誰も私の事なんて気にしません。」

「そんな事ないですよ！桜華様は候補者の誰よりもお綺麗です。きつと王子も桜華様をお選びになります！」とむきになって桜華専用につけた侍女ミルハが憤慨する。

苦笑しつつ、そんなミルハをなだめる桜華を見つつ、ティターニアはいよいよこの時がきたのだと実感していた。

Side 千早

(Side 千早)

シャンシャンシャン・・・

なんだ・・・？

鈴の音・・・夢・・・？

ふとその音がどうしても気になり熱で気怠い体を半身起こしてゆつくりと外を見る。何が？とは言えないがなんとなく違和感を感じた。一瞬だが何か強い力を感じたが気のせいだったか・・・。

だが、なんだ・・・？

何がこんなに気になるのだろう。時計に目をやれば7時を少し過ぎた頃だった。もうこんな時間か。桜華はもう帰ってきてるのだろうか？

少し重い足取りでゆっくりと階段を降りて行くと丁度お手伝いに来ていた鈴代さんが帰る所だった。

「坊ちゃん、起き上がったりして大丈夫なんですか？」

鈴代さんは子供の時分からずっと面倒を見てきてくれて居る為か、17歳にもなった自分を未だに坊ちゃんと呼ぶ。さすがに恥ずかしいから止めてくれと言っても癖になったそれはなかなかおらない。

「ありがとう、大丈夫だよ。それよりも姉さんはもう帰ってるの？」姉は学校から帰ってくると祖母に挨拶をした後は必ず自分の部屋へやってくる。丁度4時頃に、両親達の資料集めで図書館に寄るので遅くなるとは聞いていたが、もうそろそろ帰ってきていてもおかしくない時間だ。

「まだ帰ってきてらっしゃいませんよ。それよりも、あまり体を冷やさないようにして寝ていてくださいよ？お夕飯はいつも通り用意してありますからね。おかゆも作ってありますから桜華嬢ちゃんに温めてもらって下さいな。」

そういつて鈴代さんはまるで本当の子供のように自分たちの事を気遣いながら帰っていった。

姉はまだ帰って来て無いのか……。部屋に戻って携帯を使い電話をかけてみるが一向に繋がる気配がない。小さく舌打つと、もう一度時間を確認する。我ながら過保護かとも思うが、いくら姉が強いと言っても、まだ初夏の時分、暗くなるのは早いし、このご時世どんな変質者が外を出歩いているかとも限らない。

家から駅まで徒歩で7分ほどだ、迎えに行こうかと手早く服を着替え、階段を降りて行くと、丁度祖母がゆっくりとこちらへやってきた。

「ばあちゃん、ちょっと桜華を迎えに行ってくるよ。」

玄関先まできて、靴を履こうとすると祖母が首を軽くかしげながらやってきた。

「千早、お前あれを感じたか……。？」いつになく神妙な様子で祖母が聞く。

あれとは、やはり先ほど感じた力の事だろうか……。祖母も大祖母でないにしろ、力をもつ巫女だった。

「それってさっきの……。？」

「ああ、一瞬だが妙な力が働いたのを感じた。それに何か嫌な予感がしてのう……。」

「ばあちゃんも・・・？」

「ふむ・・・、千早悪いが桜華の事も心配じゃ、少し見てきてくれるか？」

「ああ、もちろん。丁度駅迄行こうかと思っていたんだ。今日は父さん達から久しぶりにメールがあったからね。」

「全く・・・あれらも困ったものじゃ。」　「そういいながらも祖母は少し微笑む。」

「では、頼んだぞ。帰ったら桜華と一緒に部屋まで来てくれ」

「わかった。じゃあばあちゃん、後で」

早足で外に出ると石畳が少し濡れていた。雨が降ったのか？　きっとこんな気分も姉の顔を見れば晴れるだろうと思いつつ駅へと歩いて行く。

だがその数時間後、俺たちは姉の失踪を知る事になったのだ。

S i d e 千早（後書き）

今回は少し短めです。途中千早サイドの動きもこれから入って行く事になります。

小さな出会い

本宮に飛行機に似た乗り物で到着して1週間、桜華はぐったりと逃げ込んだ図書室の一角で盛大に息を吐いた。

「騙された・・・。」

本宮、それは大理石とあの伝説の鉱石オルハリコンで作られたというその城はまさにため息がでるような代物だった。王妃ティファニアが住んでいた城も筆舌に尽くしがたい豪華さだったが、こちらはそれに加え荘厳さが勝っている。規模もすさまじく、王宮内を自動で走る乗り物で行き来するほどだ。

最初は見るものすべてが珍しく興奮していたのだが、すぐに1週間後、つまり今日の妃候補お披露目会の為の準備だとミルハと同行した幾人かの侍女に捕まり、念入りに毎日香油を塗り込まれ、衣装合わせ、それに見合った宝石選びなど毎日あでもない、こうでもないといじり倒され、たった一つの望みであった貴重な考古学のお宝については、まだ許可が降りていないからと諭され、がっくりしたのだが、その代わりと言って、素晴らしい蔵書のコレクションを誇る図書室へ案内されたのだ。

図書室といえども、ただの一室ではなく、それこそ吹き抜けの丸いドームの何階層に至る迄すべてが本で埋め尽くされている。

管理人に読みたい本を教えると瞬時に探してくれるが、まだ文字も勉強中なのでそこまで難しい本は読めない桜華はゆっくりと色んな本を見て回るのが好きだった。

それにしても、歴史のお宝に目が眩んで一瞬で即答してしまった妃選びに参加してしまった事をその詳しい内容を聞いてしょっぱなから後悔する桜華だった。

その内容は事前に桜華が聞いていたら絶対に承諾しないものであり、この半年で桜華の性格を見抜いていたティターニアの作戦がちたつたかもしれない。

本当に自分の浅はかさをなおすべきだ。どうも古跡や古文、それらに関する考古学の謎などを目の前に持ち出されると後先考えずに飛びついてしまう。弟の千早にもあきれられている桜華のたった一つの弱点と言っても良い。

妃選定の儀は3ヶ月に渡って行われるという。今日がその最初の顔合わせの議だ。この3ヶ月でどの候補が一番妃に相応しいかを見極めるという・・・それは良いのだが、問題は・・・。

「そうそう、桜華様、王子が桜華様のお部屋へお泊まりになられるのは最後の7日間と決まりましたので報告しておきますね。」とミルハがニコニコ顔でのたまったのが始まりだった。

「は？何の事？」

「ですから、王子がお泊まりになられる時期の事ですが？」

「何ソレ・・・泊まるってこの部屋に？なんで？」

「あれ？聞いてませんでしたか？選定の儀式の中で王子はそれぞれの候補達と7日間ずつ夜を共にするのですわ。」

「つまり、この部屋と一緒に寝るってこと？」

「そうですわ。」

「・・・ただ一緒に眠るって言う意味じゃないわよね、ソレって。」さすがに鈍いと言われる自分でも気がつく。

「まあ、桜華様ったら！」周りの侍女達もささやかに笑っている。

「聞いてないわ。それって拒否できるの？」

そんな事を聞かれるとは思わなかったのだろう、ミルハは吃驚した様子でなだめかかる。

「だ、大丈夫ですわ、桜華様。王子がきつと優しくして下さいますから、何も心配はいりません。」

「そういう問題じゃない！大体結婚前にそういうのってどうなの？もし自分の伴侶にしたい相手じゃない人が妊娠でもしちゃったらどうするのよ？」

「その場合は側室に迎えられる事になりますわ。」

啞然とミルハを見つめるが相手は当然の事と言ったように微笑んでいる。駄目だ、話にならない。こちらの世界もティターニアを見る限り一夫一婦制かと思っていたが違ったようだ。

「ティターニアの弟が皇太子なのよね？じゃあ、もしかして他に異母兄弟とかもいるの？」

「はい。ティターニア様とアクロティヌス様の母君であられるソニア正妃の他、幾人かの側室を娶っておられますので、10人ほど異母兄弟がおられます。」

「10人……。それって多いのか少ないのかまた微妙な人数ね。ふうん、じゃあ、ティターニアのお母さんってこの王宮内にいるんだ？」

「いえ……。ソニア様はアクロティヌス様をお生みになったあと、お亡くなりになりましたので……。」

「え？そうなんだ……。それは悪い事聞いちゃったな。」

桜華は頭の中で色々な事を考えながらこれからの対策を練る。桜華が最後ということは、その王子様とやらと直接対峙？する迄には2ヶ月半の猶予がある。いざとなれば急所を蹴り上げて逃げれば良いのだ。が、できれば話の分かる人物であってほしいと願う。6人も候補がいるのなら、桜華一人抜けたぐらいで文句は言わないだろう・たぶん……。

それにしても……。今日の為に飾り付けられた自分の格好を見て桜華は恥ずかしさでいっぱいだった。アトランティスでの正装、それは金糸と銀糸を織り込んだ美しい一枚布を同様の帯と宝石のついたブローチで止めるもので、最初にティターニアが着ていたトーガの

ような服装がこれだったのだ。

あの千早が言っていたコスプレってこれのことだったのかと自分の格好をまじまじと見ながら思う。

普段は私たちの世界の洋服に似たもう少し手軽なものを着ているので、こういう格好をすると恥ずかしさが倍増だ。

胸のすぐ下で帯を巻くため、やたらと胸が強調されてしまうことや、きわどい部分から足が出ている所など、本当にこれが正装なのかと疑いたくなる。どこぞのRPGの踊り子がきていそうな感じだ。

その時、後ろでコトリと小さな音がした。

振り向くと、蜂蜜色の綿毛のようなふわふわした髪をもつ小さな女の子が本の隙間から自分を見ている事に気がつく。薄い緑色の目をもつとても可愛い女の子だった。だが、目が合った途端、少しおびえたように本の陰に隠れてしまう。

何か怖がらせてしまったのだろうかと思ったが、その後すぐに侍女達に捕まってしまう、気にはなったがそのまま引きずられるように顔合わせの会場へと向かったのだった。

顔合わせ

顔合わせが行われる部屋は王宮の規模にしては小さめの円形の部屋だ。ミルハ達に付き添われ、扉の中へと足を踏み出すと、もう既に到着していた妃候補達面々の視線が突き刺さる。まだ少し時間があるのか、それぞれの妃候補達は侍女達と共に陣営を作るかのごとく、用意された椅子に座っている。

正直値踏みされるような視線と密やかな話し声は気持ちのよいものではないが、仕方がないのかもしれない。自分は王妃などなる気は毛頭ないし、いずれは地球に帰るつもりでいるのだが、そんな事情は相手側には知った事ではないのだろう。それぞれが相手を伺うような雰囲気が充満している。

桜華もミルハに促され席へ着くとゆっくりと妃候補達を眺めつつ、事前にティターニアから教えられていたデータと照らし合わせて行く。他に特にやる事もないのでどうせならこちらからもゆっくり観察させてもらおうと思ったのだ。

一番右端の金髪ゴージャスぼんきゅっぱん（言い方は古いがまさにその通りのダイナマイトボディーだ。無駄に胸元が強調されるこの衣装で、彼女の胸はホルスタインのごとくでかさを誇っている）のお姉さんは確か妃候補の中の最年長22歳で西の大きな領地を預かっている貴族の娘で名はカリオペ。家名はアリタイアだったか・・？権力者の娘らしい気位の高さを持っている女と聞いている。

その隣はクリュテ家の次女エウドラ。年は19歳、皇太子である王子と唯一同じ年の腰迄ある、流れるような栗毛と同様の瞳をもつ勝ち気そうな美少女だ。先ほどからこちらを意識して敵意のある？視線をばしばしとぶつけられている。まったくもって迷惑な話だ。私

を意識してもなんの得にもならないだろうに・・・。

3番目はクロエ メライナ。王家の呪術的な役割を代々保つ一族の娘で、クロエは中でも特に優秀な呪術師兼薬師だそう。容姿はどちらかというと中東系美女といった感じだ。白い肌だが、波打つ黒髪が腰迄体を覆っている。だが、黒いベールで顔を半分隠している上、ずっと下を向いているので表情は伺えない。

そして次は・・・ネオラ ニコラコプー、確か16歳になったばかりの少女。青眼で金色、ふわふわの髪の毛を持つ彼女を見て先ほど図書室で出会った可愛い幼女を思い出す。もしかしたら妹だったのだろうか。それにしてもこちらの人達はまだまだ比較的若い年代で結婚する人が多いようだ。まだ若いのになあと思いつつじつとその少女を見つめていると視線に気がついたのかその少女と目が合う。と、少し顔を赤くしてそっぽを向かれてしまった。先ほどの幼子といい、何か自分に怖がらせる要因があるのかとちょっと傷つく・・・。

苦笑しつつ5番目の候補を観察する。オウラニア パナギョータ20歳。均整の取れた体つきに良く合う薄緑の衣装を身に纏っている。随分と落ち着いた雰囲気醸し出している。北の惣領姫と呼ばれ、その頭脳の高さには定評があるらしい。

そして最後はフィロメナ スマローナ。年は自分と同じく18歳だ。肩迄延ばした赤めの髪をもつ大人しめな感じの少女なのだが、ティファニアの資料によると、彼女の周りでは何かときな臭い事件が多発しているらしい。

危ない感じには見えないが人間見た目だけで判断できないことは良く知っている。

失礼な事も含め色々と観察しながら考えていると、広間の荘厳な扉が開かれた。

どうやら王子がやってきたらしい。皆一律に立ち上がると胸に手を当て、臣下の礼を取る。王子から声がかかる迄顔は上げてはいけないう作法らしい。私も慌ててうつむきながら胸に手を置いた。

ティファニーアの弟・私より1歳上の19歳。妃が決まればすぐに即位するらしいのでかなり若い王となるに違いない。本人には興味は無いが、せっかく？妃選びに参加したのだから、その彼がどんな人物でどんな相手を選ぶのかを見届けてから帰るのも一興だろう。

そのとき静かに「面を上げよ」との声がかかり、桜華はゆっくりと顔を上げた。

詮索（前書き）

今回少し短めです。娘共々風邪を引いて寝込んでたので投稿が遅くなってしまうました。これからもうゆっくりですがおつきあい願います。

詮索

瞬間王子に興味のない桜華でさえ一瞬息を飲んだ。ティターニアの弟なのだから、容姿は良いだろうと思っただけだがこれほどとは思わなかった。

出発前に、こちらの世界で発達したコンピューターのようなものでプロフィールを見せてくれる予定だったのだが、何かと忙しく後回しにして、どうせ結婚する予定でもないし、どうせ本宮に行けば本人に合う事もあるだろうと見ていなかったのだ。

それにしても眉目秀麗、美麗衆目という言葉がこれほどぴったりくる人物を続けてお目に見る事になるとは・・・いうまでもなく一人目はティターニアだ。他の妃候補も普通以上に整った美人ぞろいだ、この二人はまた次元の違う美形だ。

その上、男のくせに妖艶で王姉に勝るとも劣らないただ漏れな色気。正直これほどまでの美しい男は見た事がなかった。ちらっと周りを見回すと、妃候補どころか侍女たちまで完全に目がハートになっている。

（うわあ・・・女装させたら絶対ティターニアにそっくり。さすが姉弟だなあ。遺伝子ってすごい・・・）

他とは違う意味で観察、納得しながら桜華は王子アクロティヌスを見つめる。

各候補達が、それぞれに挨拶を順番にかわして行く。時々お久しぶりですと言った言葉が聞こえるところをみるとほとんどの妃候補とは面識があるのだろう。まあ、力ある貴族の娘達が候補になっているのだから当たり前かもしれないが。8大諸侯と呼ばれる王家に近い貴族から4名、そして他の2名はそれに次ぐ位をもつ貴族の娘だったはず。他の4諸侯は、息子しかないか、もしくは娘がい

ても、王子とは釣り合わない年回りだったなどの理由で推薦されていない。

本当に王子と面識がないのは自分ぐらいなものだ。最初いくらティターニアの言うように古代からの儀式を何よりも大切にするこの国でトトス神に選ばれたとはいえ（桜華自身はそうは思っていないが）異界からきた一般人が候補として参加するのはどうなのかと思っていたのだが、さすが、ティターニア、この半年の間でかなりの根回しをしたらしく、いつの間にか自分はその王家に近い8大諸侯の一家、ポリヒウムニア家の養女とされていた。

ここにくる前の何かと忙しくの一旦には、この家との関わりがあったことはいうまでもない。王姉とはかなり深い縁があるらしく、こちらの意見も聞かずに勝手に養女の件を承諾し、短い間に貴族としての何とやら・・・を徹底的に叩き込まれた。

あのおっさん・・・もとい養父は涼しい顔をして、ティターニア以上の狸だった。はつきり言って思い出したくもない出来事だ。思わず顔をしかめたところ、ミルハの焦ったような声が耳に届く。

「桜華さま・・・！」

はっとして目線を上げると、いつの間に目前まで来ていたのかアクロティヌスの深い青緑の視線を浴びていた。とっさに取り繕たように微笑んでおいたが、きつとしかめ面の表情を見られたのだろう、少し興味本位の視線が突き刺さる。

ゆっくりと手を差し出しながら王子が聞いてくる。

「初めまして。貴方がポリヒウムニア家の・・・？」

確かに甘いマスクをして微笑んではいるが目が笑っていない。まさかで王子の表情を見ながら一瞬にして桜華は悟った。やはりティターニアの弟だ・・・、この表情に騙されてはいけないと・・・。

詮索2（前書き）

投稿が遅くなっていました。この2ヶ月、母の入院、娘の病気など色々と重なってしまい忙しくしてましたが、また週に1、2回はアップできるように頑張りますので宜しくお願いします。

詮索 2

「初めまして。貴方がポリヒウムニア家の・・・？」

「オウカと申します。アクロティヌス殿下にあらせましてはご機嫌麗しく、ご尊顔を拝しー」

事前に教えられた通りの挨拶を型通りに済ませようとした桜華を遮りアクロティヌスの低く落ち着いた声が響く。

「堅苦しい挨拶は必要ない。貴方は私の花嫁候補なのだから、もつと気楽に接して欲しい。」微笑みながら暗に目で語りかけてくる。

「ー」それがお前の素ではないのだろうと「ー」

乾いた微笑みをかろうじて引っさげながらしどろもどろに返答を繰り返す。ていうか、なんでこんなにしつこいのよ、この男！他の候補達とはそっけないぐらいにさらっと挨拶をかわしていたのに。次に行けっての！という心の願いが通じたのか、お付きの人っぽい男の人（これまた美男子）が王子を催促する。

「王子、今宵はまだ顔合わせの議にて、オウカ殿との語らいはこれ迄に・・・？」

そうそう、まだ半分残ってんだからさっさと他の候補達の所へ回れと眼力で訴えてみる。と、先ほどまでうかべていた上辺笑いを引っさげ、背筋が凍るような魔王的笑みで睨まれた。

「王子・・・？」

訝しげにお付きの人が顔色を伺う前にまた手のひらを返したように完璧な笑みを貼付けると、ずっと私の手を取り、口づける。

「ではオウカ、またの機会にゆっくりと・・・？」

優雅な足取りで次の候補の元へと去って行った王子を目の端に留め、
気づかれないぐらいの小さなため息をついた。

「桜華様？大丈夫ですか？」付き合いの長さか、ミルハだけはそれに
気がついた様子で心配そうに覗き込んでくる。

「大丈夫」そういつて微笑んでみせる。

安心したようにミルハが言葉を繋ぐ。「それにしてもお噂にたがわ
ぬ美貌と色気ですわね、さすがティターニア様の弟君ですわ。それ
にあの桜華様を見つめる情熱的な瞳、思わず私が失神してしまいそ
うでしたわ。絶対あれは桜華様のお美しさにまいられたに違いあり
ませんわ！」

情熱的・・・？あれがそう見えるのか？どう見たって喧嘩売ってるん
じゃないかと思うようなあの悪魔的笑みが？

「いや、違うと思うけど・・・」

言葉少なく相づちを打つ私を見てミルハは私が他の候補達と同じく
王子の魅力に呆然としているのだと思っただけで一人で納得してい
るようなのだが、あえて突っ込むのも面倒なのでほっておく事にす
る。

結局することもないので、また一人一人、大抵同じような挨拶の繰
り返しをしながら、部屋を回っていた王子を観察していると最後の
一人との顔合わせで少し違った様相を見せた事に興味を抱く。

相手はネオラだった。ネオラ本人は他の候補達と同じく王子の美貌
に見とれているっぽい、対する王子の様子が少しおかしいことに
気がついたのは桜華を含めほんの少数であった。

表面上同じように完璧な笑みをもって接しているのだが、桜華のと
きと同様、なにか他と違うものを感じる。桜華はその変化には気が
ついたものの、ネオラと王子を見比べながら、一番年下の少女を気

に入るなんて、顔の割にロリ入ってるのねなどと失礼な事を考えていたのだった。

4人の男達

「どなたかお気に入りになられた候補はおられましたか、王子？」
側近の一人である一人が深夜まで引き継ぎ政務に励む王子の手伝いをしながら聞いてきた。執務室には王子を含め4人の気心が知れた男達が居た。

「面白そうなのは居たな・・・。」

「それってもしかして例の変わりもんのポリヒュムニア候の養女？」
左隣に座っていた男が身を乗り出す。

「失礼なことを言うんじゃないですよ、アスリム。仮にもポリヒュムニア候は王家に特に関わりの深い方だけでなく王子のご幼少の頃の教師でもあられた人格者でとても立派な方です。」

「融通の利かないじいさんだったがな・・・。」王子がぼつりとつぶやく。

「いやだってさ、ポリヒュムニア候って8大諸侯の中でも珍しいぐらい野心がなくて珍しい方だったのに突如養女を取っての参加だろ？どんな女を送り込んだのか気になるじゃん。で、どうだったの？」

「まったく、お前は王子の御前でその言葉使いはどうかにならないのか？」しかめ面をしながら最初にアクロテイヌスに質問を投げかけた男が小さく咎める。

「良い。ここにはうるさい狸どもは居ないから・・・お前も昔のように気楽に接してくれ、ジュニユファス。」そういつて若くして3名いる宰相の一人となった幼なじみに声をかける。

ほれ見ろと言わんばかりに満面の笑みで更に問いかけるアスリムに窓際に座っていたもう一人の男が答えた。

「黒檀のような瞳に絹糸の髪、細すぎず、均整の取れた抱きごこちの良さそうな体、メライナ家の令嬢も同色だが纏う雰囲気はかなり違うな。まあ多少色気がなさそうなところが難点だが、容姿だけならあの中でもかなり目を引いたぞ。それに・・俺の勘だがあの女、結構武術の心得もあると見た。ひとつひとつの動作に隙がなかったからな。」答えたのは王家を守る筆頭騎士であるルワンドである。

「まじで？くそっ、俺も見なかった〜！」

「何をそんなに興奮してるんです。彼女は王子のお相手ですよ。それに、これは私が極秘に調べた情報ですが、どうやら彼女がポリヒュムニア家に迎え入れられたのには、ティターニア様が関わっているらしいと・・。」

「姉上が・・？あの方も既に嫁いだ身というのにいったい何を考えているのか・・。だが確かにあの娘、見た目通りではなさそうだ。俺の威嚇にも平然とした顔をしていたからな、いやあれは無然か・・？」

「確かにお前の顔に騙されない女は珍しい・・。」とルワンド。

「酷いな、幼なじみの言う言葉か？」

「てかさ、ティターニア様の考える事といえば、後にも先にも可愛い弟の事だろうが。もしかして運命の相手ってやつ？良いねえ・・ほんと7人も候補いるんだから俺にも一人や二人・・。」ぶつぶつつぶやくアスリムの頭をぼかすとジュニユファスがはたいた。

「冗談はそれくらいにしときなさい。それにしても・・ニコラコプールプー家の令嬢が候補として上がるとは、あの御仁はよっぽど

ご自分の娘が可愛くないのか、この妃選定の儀がどういふものか知らぬ訳ではないでしょうに。」ジュニユファスが考え込むように妃候補達のデータを手に取る。

「……。あの事件があつて尚娘を送り込んでくるとはな。」苦虫を噛み潰したようにアクロティヌスが頷いた。そう、確かにあの娘を見た途端、苦い思い出と共に少女に良く似た面差しの今は亡き娘の事を思い出した。

その様子を他三名が思い思いの様子で見守る。沈黙を破って声をかけたのはルワンドだった。

「今日は様子を見に行ったらどうなんだ？長い間会ってないんだろ？幼い子供はすぐに親の顔でも忘れるからな。きっと泣かれるぞ？」

「そう・・だな。休む前に少し顔を見て行こう。今日も遅くまで悪かったな。ルワンド、今日はお前も家に帰って休め。あまり長く新婚のお前を拘束していると刺されるかもしれないからな。」アクロティヌスは少しおどけた様にルワンドに笑顔を向ける。

その後、王宮の奥深くの部屋へと向かう一つの人影があつた。

訪問者

顔合わせの議が終わった後には、貴族達への妃候補のお披露目が待っている。いつもならば、ほとんど公式の場に姿を表さないポリヒュムニア候も、今回に限っては養女となった娘の後見人として久しぶりの社交界に顔を出すと巷ではもっぱらの噂だった。

「はゝ・・・」桜華は今日数えるだけで10回目の大きなため息を吐いた。

「桜華様、そんな盛大なため息をつかれなくても・・・」

「だって、今日はお義父様がくるんだよね。」

「ええ、舞踏会の前に、こちらに顔を出されると聞いてますからもうそろそろいらっしゃるのではないでしょうか？」

「いちいち様子見に來なくても良いのに・・・。」

「何をおっしゃっているのです。バシル様は本当に実の娘の様に桜華様を目に入れても痛くないほどに可愛がっておいでです。この度のお支度もどの候補に負けないものを揃えて、張り切っていらっしゃいましたものね。さすがに桜華様とお離れになる時は少し寂しそうですね。あの侯爵様がこんなにも溺愛されるなんてって侍女仲間の中では有名な話ですよ。」

「いや、溺愛っておかしいから・・・。」

「何をいつている。その侍女の言う通り、私がお前を溺愛しているのは周知の事実ではないか。」

「お義父様！」突如部屋に入ってきたのは年の頃、60歳前後のグレーの髪を綺麗になでつけた品の良い紳士だった。

「久しぶりだな、娘よ。」

「久しぶりっていつでも出発前に会ったと思うんだけど・・・」

「愛しい娘の姿を3日でも見ないと寂しくて溜まらないよ。さあこちらに来て顔を良く見せておくれ、桜華。」

どの口が言ってるんだ・・・と正直半分あきれながらこちらの世界で義理の父?となったバシルの元へと近づく。バシルの後ろで小刻みに肩を震わせながら笑っているのは義理の兄となった三男のアドニスだ。

目の前に立つ桜華に目を向けにやりと笑いながらバシルが問う。

「顔合わせの議はどうだった? 王子・・・アクロティヌスをどう思ったかね?」

「あー、ええとそうですね。一言で言うならうさんくさい人でしょうか?」

「お、桜華様!」慌てたようにミルハが叫ぶ。

「がっははは!」だが同時に答えを聞いて笑い出したバシルの声に遮られる。

「さすが我が娘だの・・・くっくく、そうかうさんくさい男か、まあ確かにな。」他の者が聞けば不敬罪だと追求されそうな話題を平然と口にする桜華達に周りにいた侍女達も多少呆れ気味に眺める。そんな雰囲気を払拭するようにアドニスが朗らかに口を挟む。

「父上、いくら父上でも王子に対して失礼ですよ。まあ、確かに彼は一筋縄では行かない所もありますけど、根はとても優しい子です。」

フォローを入れるアドニスに桜華は、そういえば、アドニス兄さまって王子と一緒に勉強されてた仲なんだっけと思い出した。義父に

教育を施されただけあって、一癖も二癖もあると思った感想はあえて言わないでおく。

「ふむ、まあこれから3ヶ月の間お前の目であの小僧を判断するが良い。きっと面白い事になろうて・・・。」

「別に何も面白い事なんてありません。ティターニアだってこの茶番が終わったらきつとそう思うにちがいないわ。」

「まあまあ、桜華、この王宮では大変な事もあると思うけど、きつと君に取って有意義なものも見つけられると思うよ。」そういって微笑むアドニスに桜華は少しひるむ。24歳の男盛りのこの義兄に桜華は弱かった。義父も分かっているアドニスを連れて来たに違いない。

結局舞踏会が始まる時間まで、訪ねてきた義父にまたしてもみっちりと行儀作法と講義を聞かされた桜華だった。

S i d e 千早 〽手がかり1〽 (前書き)

今回話の流れ上少し短めです。

Side 千早 く手がかり1く

「くそっ！」ドンツと東紀家のリビングのテーブルを叩き付けた普段温厚な息子、千早の姿を対面に座る両親は複雑そうな表情で互いを見合わせた。

娘の桜華が謎の失踪をとげて約半年がたつ。もちろん警察にも、誘拐、拉致の可能性も含めて連絡し、しばらくはテレビや新聞でも、謎の失踪事件として報道されていたが、さすがに半年も経つと随分となりを潜めていた。

桜華が消えた当初、千早から国際電話がかかってきた時は、何の冗談かと思ったのだ。夫共々緊急帰国し、すぐさま様々な方面に働きかけて娘の行方を探った。

しかし、まったくと言って良いほど手がかりが見つからないのである。桜華が最後に目撃されているのは夕刻の県立図書館だった。娘に頼んだメールでデータを送ってくれたのが最後だった。

あのとき、資料を頼まなければ桜華が消える事は無かったのかなどと、この半年悩まなかった日はない、だが私たちよりも、息子の千早が一番姉の失踪に心を痛め続けているのは分かっていた。

しかし、桜華が死んだとは家族の誰一人として思っていない。ただ、あの子が対処できない何かに巻き込まれたのだと私たちは考えている。

無理をして熱を出しながらでも千早はどうにかして、姉に関する予知夢を見ようとしていたが、もともとそれはコントロールできるものではない。そのいらだちが手に取る様に分かり辛かった。

しばらくの間家族の中に沈黙が訪れていたが、やがて絞り出すように千早が話しだした。

「父さん、母さん・・・これはずっと言おうかどうか迷っていたんだけど、実は、姉さんが失踪する前日に夢を見たんだ。」

「それは・・・桜華の予知夢だったのか？」 私たちもこれまで一度として外したことの無い自分たちの息子に宿る奇妙な力の事は十分に信頼を置いているので声がうわずる。

「予知夢である事は間違いない・・・だけど今まで言わなかったのは、それがあまりにも常識を超えた夢だったからで。最近になってあの夢が姉さんの失踪に関係しているんじゃないかと疑っているんだ。」

「常識を超えた夢って・・・一体どんなものだったの？」

千早はそれからゆっくりと思い出す様に夢の内容を語り始めた。確かにその内容はもし、桜華が失踪していなかったら、笑い出すようなものだ。それはこの現実世界では確かに存在しえない要素が詰まっていた。

「今思えば、あの時見た姉さんは、最後出て行った時よりも随分と髪の毛が伸びていた。それに、見た事も無いような大樹と神殿、奇妙な格好をした人々・・・まるで、そう、ファンタジーや異世界のよう・・・」

異世界という言葉に皆まさかと思いつつもどこかでしっくりくるような変な感覚に囚われまた口をつぐんだ。

疲れの溜まった私たちは、色んな可能性についてまた明日話し合う事として眠りについたのだが、その晩、千早は新たな手がかりとなる夢を見たのだった。

接触

宮廷晩餐会及び舞踏会、それは今回王となるアクロティヌスの正妃及び側室候補を貴族達に正式に紹介する場でもあり、またそれはそれぞれの候補達、そしてそれに連なる家族、一族達の駆け引きの始まりの場所でもあった。

形式的な挨拶が終わった後からあちらこちらでどうにかして自分の娘を印象づけようと王子とその側近の周りに人だかりが出来ている。

義父と私は彼らから少し離れた場所でゆっくりと座っていた。形式通りの挨拶さえ済ませてしまえば、別にわざわざ好き好んで王子の近くへ行く必要はない。だが、王子とは離れて陣取っているにも関わらず、かなりの数の好奇の視線が突き刺さる。先ほどから、幾人かは当てこすりで久々に公の場に姿を表した義父の元へやってきては適当にあしらわれ、憤慨しながら去って行く。またそれとは別にポリヒュムニアの養子となった桜華に対しても好奇の目は注がれていた。

この晩餐会にはもちろん王姉であるティターニアも来ていたが、王子と同じく、人だかりの中に埋もれてしまっている。

しばらくして後アドニスがバシルを呼びに来た。こんな？義父でもやはり、幾人かはちゃんと挨拶を交わす友人がいるらしい。一人で大丈夫かと聞かれたが、問題ないと言うと義兄と一緒に席をはずす。

「少しよろしいかしら？」あくびをかみ殺していた桜華の前にふとある人物がやってきた。

「はい？」突如やってきた人物に少々驚きの目を向けながら桜華はじっと相手の顔を見つめる。

「先日の顔合わせの義で、拝見してから一度貴方と話してみたいと

思っていたの。」

そういつて魅力的に微笑んだのは北の惣領姫、オウラニアだった。

「ええと、確かオウラニア様・・・？」

「オウラで良いわ。私も桜華と呼んでも宜しいかしら？」

「はい、全然かまわないですけど・・・。」ティターニアが大輪の薔薇の華であるなら、オウラニアは凜とした水仙のような気品を纏った女性だった。他の候補達の様に殺伐とした雰囲気は感じられない。

穏やかに微笑みながらオウラニアが尋ねる。

「貴方は王子の元へは行かないのね？」

「ええ、まあ・・・。」別に行く必要もないので心の中で付け加える。

「ふふ、面白いのね。あのポリヒュムニア候が養子縁組をしてまでこの妃選びに参加させた娘が居ると聞いて、ここにくる前から楽しみにしていたのよ。」

「そう・・・なんですか？でもオウラこそ何故王子の所へ行かないんですか？」他の候補達はずっと王子の周りで気を惹こうと頑張っているというのに。

「ああそう、貴方は知らないわよね・・・。私たち幼馴染みですの。別に今更取り繕ってべたべたしに行かなくてもある程度お互いの事は知ってますわ。」そういつてオウラニアは軽く肩をすくめた。

「なるほど、幼馴染みなんですか。じゃあ、幼馴染みから見て王子ってどういう人なんですか？」

「あら、貴方を見ていたら珍しく王子にあまり興味が無いのかと思っただけでもないのね？」

「いや、興味はまったく無いですけど、一応会話上流れとして参考迄に聞いておこうかと思ったぐらいで・・・。」

「つぷ。本当に貴方、面白い方ね。王子に向かって素でそこ迄興味無いって言う子初めて見たわ。気に入ったわ、桜華。本当に何故養子になってまでこの戦争に参加したの？聞きたい事は沢山あるけどそうね、今度ゆっくり私の部屋に遊びにいらっしやい。色々……王子の事なら教えて差し上げるわ。」

「はあ、どうもありがとうございます？」別に知りたくないですけど……。一応建前でお礼を言うておく。

それからしばらく当たり障りのない会話をした後、オウラニアと入れ違いで義父達が戻ってきた。

「ふむ、今のは北の惣領姫じゃな。」

「ええ、わざわざご挨拶に来てくれまして。」

「なかなか良い女子に育ったようじゃの。まああの娘は昔から頭の回転も早かったからな。」

「ああ、王子と幼馴染みだって言ってたから、もしかしなくてもお義父様の教え子だったって事ですか？」

「そうじゃ、しばらくの間であったが、王子達と一緒に勉学を教えていた。正妃候補としてはかなり有力な一人じゃな。」

「ああ、うん、頑張れーって感じだよな。」

「つくつく。これ、お前も一応候補の一人なのじゃぞ？もう少し張り合ったらどうじゃ？」

「どうじゃて言われても……。」「とりあえず私の目的としては、アトランティスの資料と共になんとか帰る手だてを見つける事なんだけどな。明日は朝一からもう一度図書室へ行ってみようと考え込む桜華だった。」

思考

今日も健やかに朝の鍛練を終えて湯浴みを終わるとすぐさま図書室へと向かう桜華。結局なんだかんだとあって、（候補達は皆妃、または側室となる可能性があるので、毎日ハードな妃教育という名のスケジュールを強制的に組まされている）次に図書室に行く時間が取れたのは5日後だった。本人にとっては幸運な事であるが、今の所、桜華の存在は他の候補達にとってそれほど大きな障害とはなっていないらしく、顔合わせの儀早々から始まった陰湿な争いから桜華は一人離脱した状態となっている。他の候補達と違い、王子に興味がないという意味表示が伝わっているのかもしれない。

それならば、何故ポリヒウムニア候の養子となつてまで妃選びに参加したのかと訝しがる面々もいるのだろうが、今の所表立って何かを仕掛けてくるといったことはないのです、桜華は候補達の中で比較的穏やかな日々を送っていた。

昨夜も誰だかの食事に毒が混ざっていたなどと物騒な話を聞いたが、桜華の食事は侍女達に毒味させることもなく普通に提供されたものを食している。

こちらの世界は、ある意味においては地球よりも遙かに突出した技術を誇っているが、国民すべてが、どうやら超能力とも言えるような能力（個人によってその力の差はあれども）を持っているので、桜華の常識では考えられない技術があると思えば、近代社会で当たり前のようにあるべき物がなかったりという事もある。

結局技術というものは必要性があるからこそ発展するので、その辺に違いがでてきているのだろう。

桜華もここで暮らし始めて、はじめて自分の中にある力の存在を知

った。たとえば、こちらで懐中電灯の代わりとして使われているものなども、自分の力を注ぎ込んで光らせることができる。幼い頃に読んだファンタジーの世界で言う所の魔力みたいなものだろうか。生まれた時から大なり小なり力を持って生まれてくるこちらの住民は幼い頃から力の使い方を親から教わり、突出した力を持つ者は学院への入学を許可されそこでさらに自分の能力に磨きをかけ、平民であれば、貴族や王族に召し抱えられる者も少なくないと言う。

ティターニアからは、この世界に関する様々な事を学んだが、面白い事にサイコキネシスのような力やテレポートなどができる人達が結構多く居るのに対し、弟の千早のような先見の力はとても珍しいらしくしかも百発百中ともなれば国中探してもいないらしい。遙か昔にはそういったものも数人生まれていたらしいが、今ではほとんどいないらしい。ティターニアに、その事を聞いた時、色々と突っ込まれそうになったのを旨くごまかし、千早の希有能力のことも調べてみようかと心に誓った桜華だった。

「でも私ってこちらの世界でも落ちこぼれなのかなあ。」ぽつりと桜華がつぶやく。

幼い子供でもできるという光を点す魔法、空気を吸うのと同じぐらい簡単にできるそうだが（こちらでは能力はあるのが普通なので力の事はリルと呼んでいるが桜華にとっては魔法と言った方がしっくりくるので自分ではそう呼んでいる）それもわずかに光らせることができたぐらいで、侍女達は優しく慰めてくれたが、才能がない事は明らかだった。千早ほどの希有能力といかなくても、何かしら呼ばれてこちらに渡って来たというのであれば、少しぐらい自分にも能力があればと思ったが、無い物は仕方が無い。

この後、桜華自身にも稀な能力が宿っている事に気がつく迄にはしばらくの時がある。

図書室で（前書き）

更新が遅くなってしまう申し訳ないです。娘が水疱瘡にかかってしまい、1週間手つかずでした。

図書室で

しばらくの間、図書室の中で参考になりそうな本を物色していた桜華。10冊ほどの本を抱え満足げに出て行こうとしたとき、ふと誰かの視線を感じて振り向いた。

そこにいたのはいつか見た幼い子供だった。今回も本棚の陰に隠れるようにしてじっとこちらを見つめている。

「この間の・・・？」

なんでこんな所にまた小さな子供がいるのかと図書室を見回すが、普段からあまり訪れる人の少ないこの図書室にいるのは桜華とその幼児だけだった。

「えっと、どうしてこんな所にいるの？あなたのママは何処にいるのかな？」怖がらせない様にゆっくりと近づきながら桜華が問う。

「ママ・・・？」

「そう、ママ・・・は何処にいるの？」そういいながら桜華はゆっくりとしゃがみ込み相手の目線に合わせて微笑む。

すると子供はわからないと言った風に問い返し桜華をゆっくりと指差す。

「え？いや、私あなたのママじゃないけど・・・ってまあいいわ。えっと、あなたのお名前はなんて言うの？」

「・・・アンブロシア」

「そう、素敵な名前だね。私はオウカっていうの。」

「オウ・・・カ・・・？」

「そうだよ。アンブロシアの事シアって呼んでいいかな？この間も

ここにいたよね。ここまでどうやって来たの？」

「・・・・・・」

「ええっと、答えたくないって事なのかな。」

怒られると思ったのかアンブロシアは桜華のドレスの裾をぎゅっと握りしめうつむいてしまった。

「えっとね、怒ってないよ？大丈夫。ただシアがこんな所に一人でいるから心配なだけだよ。ね、大丈夫だから。」

そういつて抱きしめるとアンブロシアもぎゅっと桜華にしがみついてきた。そのまま抱き上げてどうしようかと悩む事数分。

仕方ない、一度部屋に戻るかときびすを返した。せっかく選んだ本は後で侍女に取りに行ってもらおう。そのまま、アンブロシアを連れ部屋に戻ると丁度ミルハがお茶の用意をしている所だった。

「桜華様？この方は・・・？」

「んー、なんていうのか迷子？なのかな。図書室で出会ったんだけど、名前はアンブロシアって言うんだって。」

「まあ！」驚いて近づくミルハを警戒しているのか余計にぎゅっと桜華にしがみつくシアを可愛らしく思うものの、本当に迷子なら親が今もずっと探しているだろう。

ミルハに指示をだし、母親か父親らしき人物を探して来てもらう事にし、丁度お茶と一緒に出されたお菓子をシアと一緒に食べながら待つ事約一時間、困惑したミルハが共に連れ帰ってきたのは、いつかの顔合わせの儀で王子アクロティヌスの側についていた文官らしき男と乳母だった。

隠し姫

「失礼致します。私はアクロティヌス王子の側近でジュニユファスと申します。こちらでアンブロシア殿下を保護して下さっていたとか・・・心よりお礼を申し上げます。ふとした隙に寢室から抜け出されてしまったようです。探していたのです。」

部屋に入って来た美青年は油断ならない笑みを浮かべている。

「そうでしたか・・・ええと、・・・あなたがシアのお父さん・・・じゃないわよね？殿下ってことはこの子、もしかして王族なの？」

「・・・はい。そうでございます。」

「じゃあ、ティターニア達の腹違いの妹とか・・・？」

「いえ桜華様・・・。僭越ながら、余計な詮索はなされませんよう。」

おい、連れて行け。」

そういつて男は共に来た乳母に声をかける。

近づいてくる乳母から逃げるようにシアは私の足下までたどたどしく走りより揺れるスカートの裾はしを握りしめた。潤む瞳にほだされつい手を差し伸べようとしたが、それよりも早く乳母に抱き上げられ連れて行かれるシアを複雑な気持ちで見送る桜華だった。ついでジュニユファスが出て行った後、慚然とする桜華にミルハがおずおずと話かける。

「桜華様、アンブロシア様はおそらく隠し姫でございます。」

「隠し姫？それは一体なんなの？」

「以前から王宮勤めの侍女達の間で噂になっていたのですが、あの方はおそらくアクロティヌス王子の第一子であられるアンブロシア

姫でしょう。」

「・・・は？娘ってあの・・・王子の？」

「はい」

「え、でもあの子2、3歳ぐらいだよ、なに、それって15歳ぐらいの時にできた子供ってこと？！」

恋愛事に疎い桜華は驚きの声を上げる。ええ、それって、つまり中3ぐらいで父親になったって事だよ、どんだけ？！てか子供がいるって事は母親も存在するわけで、え？じゃあなんでわざわざ妃選定なんてするわけ？と頭の中でぐるぐると考え込む桜華を他所になおもミルハは説明を続ける。

「桜華様は確か、舞踏会で王子の幼馴染みであられる北の惣領姫に出会ったといっておられました、王子にはオウラニア様以外にも一人馴染みの姫がおられました。アンブロシア様はその姫がお生みになったお子様でしょう。」

私も噂には聞いていましたが、実際にこの目で見るのは初めてです。」

「え、ちよつとまって。その人が居るのならわざわざこんな選定式やる意味はないんじゃないの？！」

「いえ・・・。そのアンブロシア様の母君はもう儂くおなりになっています。」

「それって、亡くなったって事？だから新しい母親が必要なの？」

「いえ、もし桜華様が王妃となられたとしても、アンブロシア様の

お世話をなさったり母親として何かを求められるということは無い
と思います。」

「・・・どうということ?」

「隠し姫とはその名の通り、隠された姫、つまり面にでてくる事のない姫の事を言います。今迄もこの王宮の中に幾人かの隠し姫が存在したと聞いております。」

「意味が分からない。どうして隠す必要があるの? 仮にも王家の跡継ぎみたいなものでしょう?」

「私にも詳しい事はわかりません。どうしても気になるのであれば、一度テイターニア様にお聞きになってみるのが良いかと。私の口からはこれ以上申し上げる事はできません。」

「いやいや、そこまで言っというてそれはないだろうと思うが、ミルハはそう宣言した後、それ以上の事は教えてくれそうになかった。」

この幼女との出会い、それは王宮にきてからさほど何事もなく穏やかに? 暮らしていた桜華の生活に一粒の石が投げ込まれた出来事、そしてそれは波紋となり広がり桜華の運命を変える一粒となっていく事を知るものはまだいない。

深夜の密談

一人目の候補との7日間を終え、その夜、二人目の候補の部屋に訪れたアクロティヌスは早々に部屋にいた侍女達を下がらせ、差し出された葡萄酒に口をつけた。

「久しぶりだな、オウラニア。こうして二人で逢うのは久しぶりだったかな？」

「そうね、本当にお久しぶり……。」「アクロティヌスの視線を受け、オウラニアは婉然と微笑む。

「・・・あの事があってからお前は滅多に本宮へ近寄らなくなったが・・・、お前はこの話は断ると思っていたのだから？」

「できればそうしたい所でしたけど、そうも言ってられない事情がありましたのよ。己の運命から逃げる事が出来ないのは貴方も同じでしょう？」かといって運命に翻弄されるだけの小娘ではいられない。それは自分にとっても、そして目の前にいる彼にしても同じはずだ。そう、私たちは強くなると決めたのだから・・・あの時から。

「・・・・。北の事は少々耳にしている。俺としてはお前が正妃となるのはやぶさかではないのだがな。だが良いのか？お前昔からジュニユファスの事が好きだっただろう？」

「本当に嫌な男ね・・・。この後に及んでそういう事を言うなんて。」「よく言う。お前こそ俺と寝る気はさらさらなのだろう。」「

「まあそうね、どんなに顔が良くても貴方だけはお断りだわ。」「そういつてオウラニアは何かを思い出したかのように美しい顔を歪ませた。

「っふ、まあ良い、話を聞こう。何か策があるのだろうか？聡明と名高い北の惣領姫。」「

「そうよ。私が此処へ来たのは貴方との直接交渉の為。この儀式の間は鬱陶しい蠅達について来られない。彼らがいたらまとまるものとまりやしない！」オウラニアは吐き出すように言い募る。先ほどのまでの淑女然とした雰囲気から口調もややさばさばしたものと変わっている。王子は内心苦笑しつつ懐かしい馴染みの顔を凝視した。

「そちらも相当腐敗が進んでいると言う事か。」

「でなければ、わざわざこんな悪趣味な儀式に参加しないわ。まったく他の候補達も貴方のうわっつらしか見てないのでしょね。私なら絶対にお断りだわ・・・こんな中身真っ黒の腹黒い男。お人の良い女神のようなティターニア様と血が繋がっているとはとても思えないわね。」

「言いたい放題だな・・・。まったく、これでも俺は次代の王だぞ？」

「そうね・・・。腹黒だけど政治的手腕は認めるわ。ああでも貴方のうわっつらに騙されていない貴重な候補がもう一人いたわね。」そういいながら面白そうに笑うオウラニアをむすつと睨みつつ聞き返す。

「ポリヒュムニア候の養子の事か？」

「ええそう。舞踏会の時に少し話をさせてもらったけれど、なかなか面白い娘ね。貴方の側室にはもったいないわ。でもあの子、トス神が選んだ娘なのでしょ？案外本当に彼女が貴方の運命の相手なのかもね。もしそういうものがあるのだとしたら・・・」まあそうだとすると彼女を落とすのは大変だろうけど・・・と心の中で付け足す。

「なんだそれは？」

「あら・・・？知らなかったの？」意外そうにオウラニアが王子を見つめる。

「私が調べた限りではティターニア様が手を回してわざわざポリヒ

ユムニア候の家に迎え入れさせた娘は、巫女のティターニア様が神殿で祈りを捧げてトトス神から使わされた娘だと裏では評判よ？本当は何処の出なのか・・・舞踏会の時に色々と粉をかけてみたけど旨くかわされたわ。」

「・・・ふむ。姉上とは一度会って話をする必要性がありそうだな。」「まいったと言わんばかりにクロティヌスは額に手を当てた。確かに姉上の巫女としての気質は疑う迄もないが、まさか自分の妃選びにこういった形で関与してくるとはゆめにも思わなかったのだ。オウラニアが言う様に本当に運命などを信じている・・・訳ではないだろうと思いたい。彼女がああのがあってから自分の事を気にしてくれているのは分かっているが、この儀がどういったものかを知っているはずの彼女がどこの馬の骨ともわからぬ女を本宮に送りつけてくるとは・・・。私がああ娘に惚れるとでも本気で思っているのだろうか？

頭を振りつつ、とりあえずその件に関しては後回しにし、オウラニアの部屋では男女の営みが行われる事も無く交渉と言う名の政治論が明け方まで続く事となる。

王家の秘密 1

桜華がティターニアに連絡を取ってから2日の後、丁度本宮に来る用事ができたというティターニアが桜華の部屋に訪れていた。

「アクロティヌスと呼ばれたのよ。話があるってね。まあ大体何の事かは予想がついているんだけど・・ふふ。でも丁度桜華の事も気になってたしこちらに来られて良かったわ。それよりも桜華、あなたの聞きたい事って何かしら？もしかして弟の事かしら？少しでも興味をもってくれたならこれ以上嬉しい事は無いわ！」相変わらず大輪の薔薇が咲いたような微笑みを浮かべながらティターニアが膝を乗り出してくる。

この二日間、実は桜華の中では結構大きな葛藤を抱えていた。隠し姫のことについて気にはなるものの、妃になるつもりもない、ましてやこちらの世界に長居する気もない一般人が王家の秘密らしきものに関わって良いはずがない・・けれどもそう思うたびに何度も最後にアンブロシアが見せた表情が脳裏を霞めた。それに考古学者を目指す人間としてはやはり好奇心は普通の人より多く、気にしない様にとっと思ってもすぐにまた考え込んでしまう自分に白旗を上げ、脳裏の奥底で聞こえる関わってはいけないという声に蓋をしてしまった。

「図書室で2、3歳の可愛い女の子に出会ったんです。アンブロシアと言う名の・・。」

一瞬目を大きく開きその名を聞いたティターニアは何処か苦しげな表情を浮かべながら小さく息を吐いた。そして全て部屋にいた侍女達を下がらせ、扉に鍵をかけるとゆっくりと桜華の方を振り向いた。

「・・・吃驚したわ。そう、あの子に会ったのね・・・？何か聞いていて？」

「隠し姫・・・だと言う事をミルハから少し。もし・・・私が聞いても差し支えの無い事であれば隠し姫というのが一体何なのかを聞いてみたくて。」

「そうね。近い将来あの子の妃となる貴方は知っておくべきかもしれないわね・・・」

いえ、なりませんけど！と心の中で突っ込みつつ、余計な事を言つて話をしてくれなくなるよりはと黙って先を促す。

「アンブロシアが私の弟、アクロティヌスの娘だと言う事は聞いているわね？」

「はい。驚きました。こちらの世界での成人が15歳だと聞いていたし、若い年代で結婚している人達が多いんですね。まあ日本も昔は元服はもっと早かったし、そんなに吃驚することでも無いのかもしれないけど・・・つまり王子殿下が成人したさいにできたお子さんなんですよ。母親は亡くなったと聞きましたけど・・・」

「ええ・・・アクロティヌスが成人を迎えた時に添いぶしをした娘、今回の妃候補にもなっているネオラ ニコラコプールの姉だったディオルカがアンブロシアの母よ。」

「添いぶし？」

「成人になった暁に契りを結ぶ儀式の事よ。相手は大抵中位から上位の貴族の子女から選ばれるわ。あの子の場合それが幼馴染みのディオルカ、そしてその時に出来た子がアンブロシアだった。」

「そういう事って結構あることなんですか？」

「本来なら添いぶしの儀で子ができることは無いわ。必ず避妊することが前提になっているから。そうでないと余計な波乱を招く事になりかねないし。アクロティヌス・あの子がどういったつもりで避妊を行わなかったのか、これに関しては何度聞いても口を割らなかった。でも結局それが悲劇に繋がったんだわ。」

「それは、アンブロシア、いえ、シアのお母さんの死に関係してるのですか？」

「結果的に・・・そうともいえるし、そうじゃないとも言えるわね。」

「どういうこと？」

「私たちの父である現王には私たち姉弟以外にも沢山の兄弟がいる。それなのに何故あの子が次代の王として選ばれたかわかる？」

「いえ、さっぱり。顔ですか？」我ながら間抜けな答えだと思いつつ聞き返す。顔で選んだのであれば確かに他の追随を許さない美しさだ。

「つぶ。嫌だわ、桜華ったら。それだけでは流石に王には馴れないのよ。この国の王となるものは、国で一番の守りの力をもつ者なの。」

「は・・・い？」守りの力とはどういう事なのだろう。第一この世界には地球から移民？してきたアトランティスの民しかないのではなかったのか？

私の怪訝な表情から読み取ったのだろう、ティターニアが爆弾を落とす。

「気がついたかしら？ 私たちの祖先がこの世界に来た時、この世界には既に先住民が暮らしていたのよ・・・。」

王家の秘密2

そう、最初から感じていた違和感の正体はこれだったのだ。これだけ地球と似た環境で家畜や動物達が居るのにアトランティスからの移住者だけしかいないのはおかしいのではないか。

「この世界に住んでいた先住民とはどういった人達なのですか？」

「姿形は私たちと変わらないわ。遙か昔祖先達がこの地に降り立った時、この世界に住む人達はまだほとんど文明というべきものを持たない民だった。彼らは当初いきなり天から現れた祖先を神としてあがめていたというわ。私たちは彼らから土地を譲り受け、その代わりに知識を与えた。

けれども幾世代もの時が過ぎるにつれ、彼らは貪欲になってきて私たちが与えた以上の物を奪い取ろうとしてきた。初期にアトランティスの民と交わった先住民の中には幾人か私たちと同じような力を持つものがでてきて、彼らは彼らが治める国の王となりアトランティスの地へ度々攻撃を仕掛けてくる様になったの。

その時の王がこれ以上無駄な争いを避けるためにアトランティスの民を一所へ集めて結界を張った。一所といっても大陸まるまる一つだから大変よ。それから代々守る力、つまり結界を作る能力が一番高い者が王として立ち、残りの王族と貴族はそれをサポートする役目を負っているの。

王が沢山の妃を娶って子が多いのはそのためもあるのよ。だけど、血族間での婚姻ばかりが進むにつれ、なかなか子が出来にくくなって来ているのも事実・・・特に強い力をもつ者が少なくなっている。

この時代は比較的穏やかな状況が続いているけど、それでもやはり

それはアトランティスを守る結界があるからだわ。もしこれが壊れたら・・・また攻撃を仕掛けてくる国がないとも限らない・・・。」

「アトランティスの地の外にはどれくらいの国があるんですか？」

「3年に一度、私たちは外部の使者を受け入れているのだけど、前回訪れた使者は今、アトランティスを含む4つの大陸に数十の国々があると聞いているわ。滅びる国もあれば新しくできた国もあるのでしょうけど、ここ100年ほどは、国の数も落ち着いてきているみたい。」

「使者はどういった要件でこられるんですか？」

「そうね、彼らの国からまた代表が選ばれて、3人が結界を抜けてこの地に入る事が許されるのだけど、大抵は私たちの知識をもっと流通させるようにといった嘆願の事柄が多いわ。国によっては脅しをかけてくる所もあったりするしね。私たちはできるだけ彼らと関わりを絶つ事をここ数百年を貫き通してきたのだけど、最近キナ臭い動きが国内外で報告されているみたいなのよね。」

ふむ・・・。つまりこの国が維持する文明の恩恵を受けたい外の国と、関わりたくないというアトランティス側では鎖国状態が続いており、周りの諸国が開国を促しているということか。

「開国・・・はしないんですか？」

「今迄も、この国の中枢となる8大諸侯の間で議論が行われてきたわ。特に北を治めるパナギョータ家の当主は開国に強い意欲を持っているようね。はっきり言って、簡単に開国といっても様々な問題と障害があるのよ。だからこそ今迄この数百年の間、血が濃くなりすぎるリスクを犯しても外との接触を出来る限り絶ってきたのだけ

ど・・・。」そう言いながらティターニアは息を吐いた。

王家の秘密3

「色々と根深い問題がありそうですね。」開国したからといってこのアトランティスが早々他の国に攻めとられるという事はないのだろうが、複雑な事情があるのだらうと伺える。だがアトランティスの民の他に原住民が居たとしてそれとアンブロシアと何の関係があるのだらう？

「それにしてもそれと隠し姫とはいったい何の関係があるのですか？」

「さっきも言ったけど、王国全体を守る結界の力は歴代の王を中心として守られて来たのだけど、たまにその力と相反する能力を持つて生まれてくる子がいるの。言ってみれば破壊能力とでも言うのかしら・・・生まれつき巨大な力をもった子供達はその力をコントロールする事ができない上溢れ出た過剰な力は歪な力となって周囲に影響を及ぼし、その者が存在するだけで結界に歪みを生じさせる。だからそうやって生まれついた子供はその力を抑える為に作られた封具を身につけ、同じく力の制御をする為の特殊な部屋で一生を終える事になる・・・。

子供には何の罪もないのは分かっているけど、ただでさえ命を削るような結界の維持を綻びさせる訳にもいかない・・・。

現在の王である私たちの父も、もうそろそろ結界を維持するのが厳しくなってきたている。あれは特に命を削るのよ。お父様はまだ50歳になったばかり・・・でもとてもそんな風には見えなかったでしょう？」

「・・・はい。」

そう今まさに年齢を聞いて吃驚だ。初めてこのアトランティスの元王に会った時、見た目だけで言うなら、それはまさに老人だった。あんなに年をとっても子供ができるのかと内心驚いていたのだから・。この国の医療も地球の先進国と同じぐらいに技術が進んでいる。平均寿命もほとんど日本のそれとかわらない。

だがどんな力を持つ一族であっても、老いと死を迎えることは変わらない。50歳の男性が老人に見えるということはそれだけ精神力などを消耗するのだろう。ということは次代の王であるアクロティヌスも同じ運命を辿るのだろうか。

「・・・あんな小さな子がずっと外に出られないままで一生を終えるんですか？どうにかして力をコントロールする方法は他にないの？」
桜華は知らず知らずのうちにぎゅっと手を握りしめた。

「難しいわね。王宮でもアンブロシアが生まれる以前から様々な研究がなされているけどまだこれといった対処法は見つかっていないわ。ただ遥か昔にはそういった不安定な力を持つ子が生まれた場合に力を安定させる能力をもつ者が存在したようなんだけど、何百年も昔の話だし、今は国中探してもそんな能力をもった者がいた試しがない。それらの記述についても王宮にある古い文献の中でも曖昧にしか書かれてなく、詳しい事はわからないのよ。」

でもこれは最近の研究で分かってきた事なのだけど、そういった歪んだ力を持つ子供が生まれる背景には個人の持つ力の差が大きく関わっているらしいわ。アクロティヌスは次代の王に選ばれるだけの素質と能力を秘めている。それどころかあの子は歴代の王と比べてもかなり大きな力を持っているのよ。それに対してディオルカが彼

の能力を受け止めるだけの器をもっていなかったという事なのでしょうね。あの娘は生まれつき体が弱かったから……。

アンブロシアはまだ王家に、いえアクロティヌスの子として生まれただけましな方かもしれないわ。呪われた子としてその能力を持つために殺された子供達も少なくはないのだから。

ディオルカが出産を終えて、その赤子が禁忌の力を持っていると知れた時のアクロティヌスの顔は今でも忘れられないわ……。そしてその為に起こった悲劇も……。

生まれた子供がいくら次代の王の娘とはいえ、存在自体で国を揺るがすような力をもって生まれた子供……。それゆえ表向きは隠し姫として王宮の奥で育てられる事が決まったにも関わらず、半年後、アンブロシアに差し向けられた刺客から身を挺して守ったディオルカが死んでしまった。そういうことを企みそうな輩は憶測がつくものの有力な手がかりを得る事ができず結局真相は闇の中。あの時から弟は変わってしまったわ……。」そういつてティターニアは悲しそうにその瞳を伏せた。

姉と弟1（前書き）

かなり遅くなってすみません。7、8月も来客万来でちょっと更新が遅くなると思いますが出来る限り時間を見つけて書くので宜しく願います。といっても大分亀になりそうですが・・・。他の小説も1、2話書き貯めていたのをちかじか放出・・・というか囚われの王子の方はほとんど終わりがけなのでもしかしたらこちらを一時停止してあちらを終わらせるかもしれませんが、でもこちらの方もできるだけ更新頑張ります。

姉と弟1

桜華と王家の秘密について話した後、ティターニアは弟に逢うために執務室へと出向いていた。

来訪を告げるとすぐに扉が開かれ中に迎え入れられる。ぶっちょう面をしてこちらを軽く睨む弟にティターニアはどこ吹く風といった感じだ。

「久しぶりね、アクロティヌス。前回の舞踏会ではほとんど話す機会が無かったからこうやってお前の顔を見るのは本当に嬉しいわ。」

「お久しぶりです、姉上……。確かにこうして顔をつき合やすのは姉上の結婚式以来でしょうか……。義兄上はお元気ですか？」

「元気よ。相変わらず本の虫で屋敷の書室に籠っているわ。」

「なるほど……。義兄上らしい。それよりも姉上、私がお呼びした件についてなのですが……」そういつてアクロティヌスは手元にあった書類をテーブルの上に置く。

「どういふことかご説明いただけますか？」

書類を手に取りしばらく眺めた後

「あら……。良く調べてあるわ、流石ジュニファスね。彼のような優秀な部下がいると私も安心ね。」そういつて笑みを浮かべたままティターニアは美しい足を組み替えた。

「……。姉上！ごまかさないで頂きたい。一体どういう思惑で妃候補を王宮に送り込まれたのか？表向きはポリヒュムニア候の養子とはいえ、実際は何処の誰かも分からぬ者、今がどういう時か知らぬ

貴女ではないでしょう?!」

「だからこそ私はあの子にかけているの。本当の事をいって貴方も桜華の事が気に入ったからこそ私を呼んだのでしょうか?」

「気に入る、いらないう問題ではないでしょう。確かに面白そうな娘だとは思いますがあの娘には荷が重すぎる。いくら姉上とポリヒュムニア候が推そうとも他の貴族が黙っていないだろう。それ以前に他の候補達に妃の座を争う相手とも見られてはいなさそうだがな。候補達の間で様々な駆け引きが始まっているがあの娘の周りは至って静かだ。それにあの娘自身、私に近づこうともしないが・・・」そういうってアクロティヌスは何かを思い出したように小さく笑う。

「・・・この半年間、バシルがつきつきりで教育を施したわ。稀な逸材だとのことお墨付きよ。彼が半端な判断を下すことがないのは貴方が一番良く知っているでしょう?」

「本気なのですか・・・?」

「もちろんよ。それとも他に誰かめばしい候補でもいるかしら? 一番有望株のオウラニアは昔からジュニユファス一筋だし、カリオペは家柄も悪くはないけど、貴方の好みじゃないでしょう? エウドラとフィロメナにはまだ荷が重すぎるし、ネオラは問題外ね・・・まさか姉妹揃って召し抱える訳ではないでしょう?」

クロエは家柄は文句ないけどあの社交の無さは側室ならまだしも王妃には向いていないでしょうね。まあ水面下ではそれぞれ動いているようにだけ・・・。」

「あの娘が彼らに勝ると? ほとんどの者達は王妃になるべくして幼き頃より一流の教育を受けて来た者に半年やそこら勉強した者が?」

「ええ。トトス神の巫女である私が断食の祈りをもってもたらされた娘ですもの。」

「トトス神ね・・・本当の所、あの娘は何処から連れてこられたのです？」

「あら・・・信じていないの？本当にあの子はトトス神が使わされたのよ、テラからね。最初は言葉だけでなく読み書きも出来なかったというのにほんの短期間にそれこそ綿に水がしみ込む様にこちらの知識を吸収していった。それに、桜華はかの地に残った我が祖先の血を色濃く継いでいると思うわ。本人はまだ気がついていないようだけど。それに彼女の双子の弟だという千早という者は失われた先見の力を持つそうよ。」

「テラから・・・?! そんな、まさか! いやしかし・・・」

「本当の事よ。詳しい事はあの子に直接聞くと良いわ。そうそう、それとアンブロシアに逢ったそうよ?」

「え?」

「その報告はまだ受けていないのかしら?」

「いや・・・確かにジュニユファスからアンブロシアが部屋から抜け出していたという報告は受けていたが・・・。」

「そう。私の聞いた限りにおいては随分と懐いていたそうだけど・・・
実の父親である貴方以上に?」

「・・・。。姉上、まさか余計な事を話されたのではないでしょうね？」

姉と弟2（前書き）

亀更新が続いてますが、9月の頭まで、毎週来客続きなので、ほんとゆっくりになってしまいます。アー・・・もうひとつの方も・・・

>|<

姉と弟2

「余計な事とは？」

己の鋭い眼差しを受けつつ、分かっているであろうに、にっこりと穏やかに微笑みつつ言葉を返す姉をアクロティヌスは苦々しく言葉を斬りつける。

「まさか、隠し姫の事を話したのではないでしょうね？」

「話したが、何か問題でも？」

「も、問題があるのかでは無いでしょう！あの存在は王家と8大諸侯のみが知る存在であって・・・！」

「だから、問題ないでしょう？あの子も近い将来王家の一員となるのだから。」

「まだ決まった訳ではありません。確かに祖先が住んでいたというテラから来たというのが本当であれば、興味はありますが・・・だからといって姉上がどうしてもそこまであの娘を推すのか・・・。」

「本当に・・・お前は自分の事をよく分かっていないのね？　だが私はお前の事を良く分かっているつもりよ。亡くなられた母君の代わりに私が幼い頃からお前を育てたも同然なのだから。そんなことよりも、もっと桜華と逢う時間をもうける事ね。すぐに私の言った事が分かるでしょう。あの子は貴方にとって無くてはならない者だわ。」

「・・・。」何をいっても聞く耳を持たない姉に最後にもう一つ確認する。桜華という娘を本当の意味で候補にするというのであれば・・・。

「私があの子に接触をもった時点で、あの子もこの争い毎に巻き込

まれる事になりますが、本当にそれで宜しいのですね？」

「もちろんよ。」

「それと姉上・・・先日オウラニアがもたらした情報に依ると北の境界線がかなり揺らいでいるようです。父上の力もあとそう持たないでしょう。私が王位を継ぐと同時に外との外交が始まります。今回は通常の定期会合とは違い内側からの開国に対しての要請もあり、難しい事態が予想されます。」

「その話は私も少し小耳に挟んでいるわ。貴方の王としての素質が試される時ね。確かに、この国内で行き詰まりを感じている民の数は少なくはない。数百年の鎖国にはそれだけの事情があったのだけれど、それももう・・・。いえ、なんでもないわ。でも、これだけは覚えておいてちょうだい。私は桜華に希望を見いだしているの。予感があるのよ。私の巫女としての力はそれほど強いものではないけれど・・・この時代に彼女がもたらされた意義は大きいー隠し姫のことについては、まだ少ししか話していないわ。後は貴方が話すのね。ディオルカの事も含めて・・・。」

そして何かいたそうな視線をうける。姉は知っているのかもしれない。俺がディオルカとの間に子を設けた本当の理由も・・・。

「もうそろそろ時間ね、アクロティヌス、今度逢う時は貴方の王位継承と桜華との結婚式・・・。うまく行く様に心から願い祈っているわ。」

桜華は・・・。いえ、あの娘には望まぬ事となってしまうかも知れないけれども・・・貴方たち二人の幸運を願い続けましょう。」

「桜華は色んな意味でとても魅力的な娘よ。貴方の今迄の方法では簡単に落ちないでしょうけど、この国の未来の為にも頑張ってください。」

うだい。」

そう最後に言い残して姉は王宮を去って行った。

廻り始めた齒車―日常の崩壊―

一体どうしてこうなったのか・・・ここに頭を悩ませる一人の乙女がいた。

「桜華様、お食事の支度ができました。」

ミルハの言葉にのろのろと座っていたベルベット生地のスファアから立ち上がり、テーブルにつく。今日の食事もいつものように全てが整えられ美味しそうだ。

ゆっくりと手前にあった柔らかいパンを手でちぎり口に放り込む。食事が進むにつれて目の前の桜華の好物である、ひよこ豆らしきもののスープに手をかけようとしたが、何となく今日は食べる気にならない。スプーンを持ってみたものの、即座にテーブルに戻し、食事を終える。

「あら、桜華様。今日は大好物のスープは召し上がらないのですか？」不思議そうにミルハが問う。

「うん、今日はなんか食べる気にならなくて。ごめんね、悪いけど全部下げてもらえるかな？ 殿下がくる前に一通り読んでおきたいの。」そういつてまたぐったりとソファアに身を投げ出すと桜華は一冊の重厚な本を手にとった。

そんな桜華を労りながらも何処か誇らしげに嬉しそうな侍女達が後片付けをしながら見守る。

桜華自身を感じる穏やかだった日常の崩壊は数週前に遡る。あれは確かティターニアと面談した2日後の午後、いつも通り意気揚々と人気の少ない図書室に向かった桜華を出迎えたのはアクロティヌスだった。

「し、失礼しました?!」思わず反射的にドアを閉めかけた桜華だ

ったが、ばんっと足を挟みつつ、自分の腕をつかむ男の顔をおそるおそる見上げるとそこには顔合わせの儀で見た胡散臭い笑顔を浮かべる殿下がいた。

「・・・あの、えっと、なんの御用でしょうか・・・？」さすがにこの状況で逃げる訳にもいかず日本で培った必殺外用の仮面をかぶり一応義理の父からうるさく教えられた淑女の笑みを浮かべる。つまりは王子と同じ外用の猫の面だ。

「桜華殿とは顔合わせの儀以来、ほとんど対面することが無かったから一度じっくり話しをしてみたいと予々思っていたんだ。それに・私の娘アンブロシアも此処で君に世話になったらいいから、そのお礼も兼ねてね。」

アンブロシアの名を聞いて、少し警戒を解いた桜華を畳み掛ける様にアクロティヌスは事前に姉から聞いていた桜華に有効だという奥の手を出した。

「それともう一つ・娘の相手をしてくれた礼に以前から申請されていたアトランティスの古文の貸し出しを許可しよう。」

「本当ですか?!」

そこには先ほど迄自分を胡散臭げに見ていた少女とは到底同じ少女とは思えぬ、心からの笑みを目にした途端何故か心臓がぎゅっとかまれるような感覚を覚え自分でも動揺するのを感じる。

動揺を悟られぬ様、あくまで笑みを浮かべたまま、アクロティヌスはゆっくりと息を吐き言った。

「ああ、本当だ。ただし、君がその古文を読む間は、私と一緒に居

てもうことになる。」怪訝な顔を浮かべる桜華を引き止める様にな
おも言葉を紡ぐ。

「なんといってもあれらはそれぞれ1冊づつしか現存せぬ貴重な物
だ。本来なら王家のものしか読む事を許されぬ物なのだ。それゆえ
扱いには気を付けなければいけない。」

「・・それは分かりますけど、王子はとても忙しくいらっしやる方
ですし、わざわざ時間を割いてもらうのは申し訳ありませんし。」
なんとか王子との接触を避けたい桜華ではあったが、結局本の魅力
と王子の説得に負けてしまい、それを承諾してしまったのが、運の
付きだった。

廻り始めた歯車―日常の崩壊―（後書き）

やっと王子が本格的に動き出しました。それに連動して他の側室候補達も動き出します。平穏な日々とおさらばです。

策略（前書き）

遅くなりました。
>
|
<

策略

「どういう事なの？」薄暗い部屋に響く主のいらだちの籠った声に控えていた女はぶるつと小さく身震いする。

「これで何度目の失敗だと思っているのかしら？本当に食事に混ぜておいたのでしょうか？」

「も、もちろんです。ですが・・・、薬を混ぜた物に関しては毎回いっさい手をつけないのです。」

「毒見をするものは居ないのでしょう？毎回毒の入った皿だけを抜かして食べるなんて芸当ができるはずもない。だとしたらお前が本当に毒を入れたのか疑わしい事だわ。」

「そんなことは決してありません。どうか、もうしばらくお待ち下さい。今迄の事は偶然でございます。今度は、一皿ではなく、全ての皿に・・・ですから今度こそ！」

女は床に這いつくばる侍女を尻目に先の尖った己の靴で、侍女の手を踏みつけた。

侍女が小さく声をあげるのを冷ややかに見下ろし言った。

「もう一度だけチャンスあげるわ。もし、今度こそ成功しなかった場合にはわかっていてしょうね？」

「・・・もちろんでございます。」指先に走る激痛に耐えながら床に這いつくばった女が答えた。

侍女が出て行った後、女は部屋の片隅に飾られていた花を抜き取り握りつぶす。

「本当に忌々しい女・・・。どうして王子はあんな女などに・・・。」

当初、王姉ティターニアと、後見人であるポリヒュムニア候を後ろ

盾にして、后候補の選定式に割り込んで来た女……。容姿は確かに美しいとはいえ、どこの馬の骨かもわからぬ養子など敵ではなかったはずだった。

今迄政治の局面に表立って出て来た事のないポリヒュムニア候が後ろ盾になったことで、一時は対峙するすべての貴族間に緊張が走ったが、顔合わせの儀を終え、また舞踏会が終わってしばらく立つ頃にはその女は完璧に候補から落ちこぼれた存在だったのだ。

それなのに……。情勢が変わってきたのはつい最近の事だ。それまで、王子は候補達をこれといった特別扱いもせず、同等に扱われて来た。それぞれの候補が王子に最大限のアプローチを仕掛けているにも関わらずだ。

先日、4人目の候補との1週間の伽が終わり、今度は自分の番と言う時になって、王子の行動に変化が訪れた。

何を思ったのか、毎日あの忌々しい女の部屋へ通うようになったというのだ。

この事について出足をくじかれたと思ったのはもちろん自分ばかりではない。他の候補達にとっても寝耳に水であった。

その事をサロンで聞いた時、唯一、北のオウラニアだけは面白い事を聞いたとばかりに笑っていたが、こちら側にとっては冗談ではない。

王子の幼馴染みであり王妃の最有力候補と呼ばれていたオウラニア姫が実際のところ、王子との結婚に否定的であると分かった後、どれだけ自分たちがその情報に沸き立った事か。もし側室になれたとしても、王妃と側室の実権の違いは比べる迄もない。これから王子が夜自分の部屋を訪れる際、どうやって王子を口説き落とそうかと考えていた矢先、王子がすでに候補としては忘れ去られていたはずの女の元へ足しげく通っているとの知らせがもたらされた。

しかも、偵察に向かわせた者曰く、それだけでなく、あの王子が、熱心にその女を口説いているというのだ。

最初はどんなガセネタだと嘲笑に伏したが、事実、王子はその女のもとに毎日通う様を見て、それが真実だと知った。

何故？と考える余裕もなく、限られた時間の中で順番の廻って来た夜伽の時間を駆使して王子にもその本意のある所の探りを入れるがのらりくらりとそらされ、熱い塊に翻弄され朝を迎える。

邪魔者は早めに駆除するのが好ましい、そう思っているのは自分ばかりではないだろう。噂がささやかれるようになってから、あの女の元に他の候補達からの刺客も差し向けられるようになったはずだが、他の陣営よりも手薄なはずの女は今日も何も無かったかのように王子を出迎えていた。

平行を辿る押し問答1

連日部屋を訪れる王子を前に桜華は最近では困惑を隠しきれずにいた。

桜華にとって意外だったのは王子自らがまだ桜華の理解できていない古語や書かれている様々な事柄について熱心に教えてくれたことだった。だが、それと同時に桜華のバックグラウンドでもある地球の国々のあり方、また日本の歴史、政治、鎖国に対しての政策まで毎日数時間にも及び問答が繰り返される。

それと同時に今迄穏やかだった日常は崩壊を遂げていた。

最初に違和感に気づいたのは朝に欠かさず行っている自己鍛練の時、とっさに殺気を感じ飛び退いた場所には矢が刺さっていた。ある時には、図書室の本棚が倒れこみ、ある日には移動中に何者かに階段から突き落とされ、そして今日、たまに部屋に遊びにくる猫に私を手をつけなかった豆のスープを侍女があげた途端、その猫は苦しみ悶えて亡くなった。

これはどう考えても目の前にいるこの男の来訪から生じるありがたくもない余波に違いないのだが、さてどう話を切り出そうかと考えている時に相手の方から思いも依らぬ糸口が開けた。

「今日此処で猫が一匹亡くなったようだな？」

「ええ。私が食べ残した豆のスープを飲んで悶え死にしました。」

「そろそろ・・・毒味と警護の数を増やすべきではないかと思うが・・・？」

「貴方が此処にさえ来なくなればそれらは必要では無くなります。」

「つれないな、我が愛しの君は・・・」そういつて桜華の顔を覗き

込む様にしてもし周りに侍女達が居たなら悲鳴のひとつも上げるような魅惑的な微笑みを浮かべるが、当の桜華は呆れた様に軽く王子を睨みつけた。

「王子自らこの古書について教えていただくのは本当に有り難く思っておりますが、どうやら外野は色々和无い事があるように勘違いしている様子・・・、これ以上被害が大きくなる前に王子自ら勝手に出回っている、愚かな噂を一蹴してもらえないでしょうか？」

「愚かな噂とは・・・？」

知っている癖に！と桜華は内心で舌打ちをする。

「私が、貴方の后候補の最有力候補であるとか、貴方の寵を受ける姫だともろもろのそういった噂です！」

「別に何も間違っては無いと思うが？」

「なっ、何を言ってるんですか？！冗談にもほどがあるでしょう？相手の素っ気ない、だが捨てておけない返事について今迄の王子に対しての敬語が薄れ、素がでてしまう。またそれを面白そうににやにやと笑って眺める男に桜華は苛立を隠しきれない。我ながら未熟だとは思いますがそもそも、自分がこんな目に逢うとは露程も考えてなかったのだ。本宮に来る迄桜華の頭の中にあっただのは垂涎のお宝とも言えるアトランティスの秘密に迫る古書達、またはそれにまつわる品々の事・・・もしも時間を巻き戻せるなら、あのときの自分に拳骨をくれた気分だった。

「冗談ではない。俺がお前を正妃にと考えているのも、其方の事を愛しいと感じているのも事実だ。桜華がこれほど、政治や歴史に通じているのは嬉しい誤算でもあったがな。それに自分を守る手だて

も持っている。王家直属筆頭騎士のルワンドが驚いていたぞ？明け方に毒矢で襲われたところを見事はねのけたそうだな？あいにく犯人は取り逃がしたようだが・・・それにしてもその危機管理能力には目を見張る物がある。其方の話から察するになかなかに温い世界から来た割にはそれに見合わぬ度量ではないのか？」

どこから見えていたんだ・・・この間の朝の鍛練中の出来事もこの男の側近に見られていたらしい。本当に厄介な事になってきたと頭をかかえなくなる桜華だ。

「あちらの世界でも、色々ありましたから。初めに言ったはずです。私は后などになるつもりは毛頭ありません。弟が迎えにくるまでの間、ここに滞在してこちらの文化や歴史などを学びたいだけだと。いつか帰ってしまう女を后にして何のメリットがあるんですか？大体私じゃなくても、嫁候補は片手に余るほど沢山いるじゃないですか？」

「問題ない。俺が必要としているのは只の馬鹿な飾りの妃ではない。それに帰ると言うが、お前の弟が迎えにくると言う保証は何処にある？姉上に保護されてからもう1年近く立つと思うがよしんばその弟がこの地に来られたとしても、帰れるという保証はあるまい？」

平行を辿る押し問答2（前書き）

遅くなってしまうました。すみませんー。

平行を辿る押し問答2

「千早は絶対に来てくれるわ!」

「だからどういう根拠があってそう言いきれるのかと聞いているんだ。大体遠い祖先のような時渡りの術を持たない者がこの異世界へ来れる確率は低いだろう。それともお前の弟はそこまで能力の高い者なのか?」素晴らしいながら油断なく彼は探りを入れるかのように聞いてくる。その意味も分からず私は声を荒げていた。

「知らないわよ、そんな能力とかって。大体私は普通に地球で生きて来た一般人なんだから。千早は確かに私と違って希有能力を持っているけど・・・でもそんな事関係ない、千早は絶対に私を見つけて来てくれるはず! なんてかからないけど、絶対そうなの。」桜華にも自分の言に根拠がない事は十分に分かっている。それでも千早が自分を見つけて来てくれるという絶対的な自信は揺らぐ事なく根底にあった。

「お前が一般人とは言いがたいだろう・・・?」呆れたように王子が呟いた。

秘密裏に桜華につかせている陰の者からきいた限りにおいても、なんらかの能力を有していると言いきれる。大体毎日出される食卓で、毒の入ったものだけを器用にのけて食べるなど神業だ。しかも、使われた毒はすべて無味無臭の猛毒性の高い物ばかり、中には口にしたら最後、廃人生活がまっている中毒性の高い麻薬まで含まれていたという。

まあ、弟が来ようと来れまいが、桜華を妃に据えるという己の意思は変わらない。当初、姉のティターニアにくってかかったのが嘘の

ように今の自分は笑えるぐらい目の前にいるこの不可思議な女の魅力に捕われてしまっている。

よしんば、本当に弟が来たとしても、もしそれがこの国の役に立つ者であるのなら桜華と同様、逃がしはしない……。

その時に浮かべたアクロティヌスの表情はまぎれもなく捕食者のそれであった。だがそれを気づかせぬようにゆっくりと間合いを詰め、少しずつ外堀を埋めて行く事にする。どうやら姉が言っていた通り、恋愛面に関してこの少女はあくまでも疎いらしい。古文の解説を手伝いながら話していた当初、突きつけられた彼女の言葉はとても興味深いものだった。あの時既に自分は彼女に捕われていたのだろう。

＜そういえば王子、機会があれば聞いてみたいと思ってたんですが何故、妃選びと同時に側室まで作る必要があるのですか？＞

？？力のある王族を沢山作る為だ。子を沢山持つ事は王族の勤めでもある。何よりもここ数十年の内に突出した力をもつ王族、貴族の数が大分減って来ていることもある。

＜だけど、それでいらぬ争い毎が増えるのは目に見えているでしょう？＞

？確かに・・・、だがお前は心配しなくても良い。俺はお前一人しか娶るつもりはないし、側室はもつつもりはない。その代わり桜華には必ず幾人かの子を産んでもらう事になるがな。

＜は？なんで私？！ 冗談はほどほどにしてください。あー、じゃなくて、それよりも私聞きたい事があるんです。アンブロシア姫の事。詳しくは貴方に聞けってティターニアはそこまで詳しくは教えてくれなかったから。＞

？そうだな。確かに今となってはお前には話しておく必要がある。

<？？？、いや、意味わかんないです。というか、アンブロシアについては色々と気になってるけど、ああ・・・でも、いや・・・>
目の前でくるくると変わる表情を眺めつつ自分が姉にも伝える事になかった事実をこの少女には知ってもらいたいという思いが沸き起こるのを、自分自身驚きをもって受け止めていた。

平行を辿る押し問答2（後書き）

平行を辿る押し問答編が終われば、千早君の方に移ります。

過去の残照1（前書き）

ものすごく遅くなってしまって申し訳ないです、母が病気で実家に帰っていたりしたので。これからまた定期的に返るのでヨロシクお願いします。

過去の残照1

アクロティヌスはゆっくりと語りだした。

「オウラニアやジュニユフアスらが私の幼馴染であったようにア
ンブロシアの母であったディオルカもその中の一人だった。王の子
供達には幼い頃より有力な貴族や豪族の娘息子が遊び相手、ひいて
は成長してからはまた良き競争相手にもなり、優秀なものはそれか
ら次代を支える王の従者、側室などになる場合が多い。

だがディオルカは大人しくあまり目立たぬ女だった。あまり人前に
出る事を好まない、私たちが遊んでいる時もいつも一歩外から微笑
みながら見ている。同世代のはずなのに何処か大人びた雰囲気だっ
た。特別仲が良い訳でも悪い訳でもなく、ただいつも其処にいるの
が普通だった。だからディオルカに特別な感情を抱いていた訳では
ない。少なくともあのとき迄は・・・」

「何があったのですか？」

「あれは私が成人の儀を迎える為の相手を選んでいた時だった。う
ん？ ああ、そうだ。さすがに王になるものがやり方も知らないとい
う訳にも行かないからな。王族の男性はすべて添いぶしの相手から
色々と教わる事になる。大抵は年上の女官やその道の手だれが相手
になるか、もしくは貴族の子女だ。本人の希望があれば相手を指名
することもできる。俺の場合がそうだったように・・・。

俺はすでに14の頃にもう女を知っていたから、はっきりいって添
いぶしの相手は誰でも良かった。今更教えてもらうような事は無か
ったしな。

何だ・・・その軽蔑したような目つきは。まあいい・・・どちら
にしろ、お前には全てを話すつもりでいるのだから。

そんな彼女が自分に向かって言った事はそれなりにショックだったのだろう、問いつめる俺に彼女はますます小ウサギの様に怯え青ざめながらだがはつきりと首を振り言った。

『いいえ、違います。これは私の父も預かり知らぬ事です。父は私のようなものが王子の相手にはならないだろうと最初から諦めていましたから。』確かに普通の慣例から行くと、添いぶしの相手はそれなりの経験を積んだ女が望ましい。だが自分がすでに幾度も様々な女達と契りを交わしているのは知られた事実だ。別に相手が処女であろうが、手管であろうが気にする事はない。だが、ある程度女を知った王子がわざわざディオルカのような大人しい娘を選ぶ可能性は低いと踏んでいたのだろう、確かに今の今まではそうだった。姉の様に慕っていたディオルカを相手に選ぶなど露程も考えた事はなかったのだ。

過去の残照 1 (後書き)

千早のターンが少し伸びそうです。謎のディオルカ編です。

過去の残照2（前書き）

またまた遅くなりまして済みません

過去の残照2

「ではどうしてっ?！」

遮る様に彼女の声が静かに辺りを包み込んだ。

「理由はこれです。」そういつて彼女が差し出したものに見覚えがあった。つい先日自身の成人の儀に合わせて対象となりうる子女の健康検査が行われていた事は知っている。仮にも王家の相手となるべき者が性病ややっかいな病気を抱えていないかなどを検査するものだった。

差し出された検査結果らしきデータをおずおずと手にとる。ああ、そうだ、俺はこのときに既に嫌な予感がしていたんだ。

読み進むうちに自分でも表情が固くなっていたのが分かった。

「どうして・・・こんな・・・? いや、だがこの病気は・・・。」

「・・・王子もご存知の通り、この病気は他者に移るような物ではありません。ですが確実に私の命を蝕んでいる事は確かです。あと、良くて数年しか生きられないと知ったとき、私は決心したのです。私は今迄父の顔色を伺いながら生きてきました。父に言われるまでもなく、私は貴方をお慕いしております。ですがもしこんなことでも無ければ私は一生貴方に想いを伝える事無くいつかはいずれかの方の元へと興していた事でしよう。貴方は私にとって太陽のような方でした。見ているだけで幸せだったのです。

ですがあと数年しか生きられないのであれば、私は欲がでたのです・・・。一度で良いから貴方の瞳に映る自分を見てみたいと。

もちろんそれだけならば、別に添いぶしにこだわる必要はありません。王子はお優しい方ですから私が望めば抱いて頂けたでしょう・・・? ですが、それと同時に両親の事も考えました。あんな親ですが私にとっては大事な父親です。最後の最後ぐらい父の希望に添える

ならと考えました。

ですから、私は王子がお優しくこんなはした女の戯言を無下になさる事ができないのを知っていて申し上げているのです。最低な願いだとは自覚していますが、どうか添いぶしの一夜に私を選んで頂けないでしょうか。」

そこまで一気に言いきってディオルカはじつとアクロティヌスの目を見つめた。

数分の沈黙の後、アクロティヌスは大きく息を吐いて言った。

「分かった。そのように取りはかろう。」

「ありがとうございます。」そう言って微笑んだ彼女の笑みはとても静かで美しかった。

後日俺は、添いぶしの相手にディオルカを指名し、通達があった、ディオルカの実家は思いがけぬ幸運に舞い上がったと聞く。通常、添いぶしの相手が既婚者でなかった場合には将来的に王妃か則妃に選ばれる確率が高かったからだ。だが、彼女がそうならないことは俺と彼女自身だけが知っていたのだろう。

当日、俺はできるだけ体に負担をかけないように彼女を抱いた。普通であれば必ず避妊をするのが前提になっていたが、お互い言葉もなく自然に俺は彼女の中で果てた。確かに軽はずみな行動だったもののしられても仕方がないかもしれない。だが、まさか本当に彼女が妊娠するとは思わなかったんだ。

数ヶ月後、懐妊の話を聞いたときにはまさかと思ったが、DNAの結果でも間違いなく、俺の実子だと言う事が証明され、ディオルカの父親は気も狂わんばかりに喜んだ。だがそのときに彼女の病氣も家族の知る所となり、気まずい事となったが、それでも俺もできる限り最高の医師を看護にあたらせ、万全の用意で出産を支持した。

そして産まれた子は・・・禁忌の力を持つ忌子だったのだ。何度自分を呪ったかわからない。産まれてすぐに不安定な力を発揮した我が子は混乱と波乱を呼んだ。もちろんアンブロシアが悪い訳ではない。だが、次期王の子とはいえ、禁忌の力を宿した娘を殺すべきだと言う声も多くあり、結局父王の決定により、幾重にも幼子に封印を掛け、王宮の奥深くに閉じ込めるという事で落ち着いた。

ディオルカに・・・なんと声をかけて良いか分からなかった俺は最低な父親だった。だが、決議が決まり、赤子を送らせる途中にアンブロシアが襲われ、子をかばってディオルカが亡くなった。彼女の最後の言葉はこんな頼りない俺を責めるものではなく、ただ、アンブロシアを頼みますとの一言だった。

過去の残照2（後書き）

ディオルカの病気は今でいう癌のようなものと考えてください。

禁忌の娘

禁忌の力をもった娘として俺の娘は周囲から厭われた。王宮の奥深くに隠される様に置かれた娘は「隠し姫」と呼ばれる様になり、様々な噂がされるようになった。姉から少し聞いているとは思いますが、アンブロシアの存在が守りの力を弱めるというのは本当だが、それは表向きの理由にしか過ぎない。本当の禁忌とされる理由は、消し去る力だ。

……意味が分からないと言った様子だな、無理も無い。これから説明しよう。

アンブロシアが産まれてから数日、部屋の中にあったいくつかの小物がこつ然と姿を消した。最初は盗られたと思い捜査をしたが、無くなったものはこれといって別にそれほど価値のあるものではなく、売るのなら、無くなったものよりもよほど価値のあるものがその部屋の中にあつた。だからその時はそれほど気にもしなかったのだが、次にアンブロシアが寝ていたベビーベット、大型の衣装棚などが消えたとき、疑問が持ち上がって来た。

杞憂であってほしいと願っていた私たちの望みもむなしく、産まれて3ヶ月にもならぬ子供はその力を発揮し、ついには部屋ごとその存在を消してしまった。

これを脅威に思わぬ人間は少ないだろう。アンブロシアの力が分かっただけに、その力を抑えるための呪具を身につけさせたが、彼女の力はこれまでに報告されてきた他のケースと比べても段違いに強いものだった。他のケースでは物以外にもその者の近くにいた人間までも消えたケースが報告されている。

産まれて3ヶ月にして部屋ごとその存在を消してしまう能力を持つ

た娘を恐れ会議にてほとんど幽閉と言っても良い可決がなされたときにも俺は無力な自分を呪った。その後、アンブロシアを狙った暗殺から身を挺して守ったディオルカが亡くなり、俺は余計に自分の無力さを嘆いたが、だが嘆いていても現状が変わる訳でもない。俺はすぐさま医学や能力者達の専門のチームを作らせこの奇妙な力の解明にあたらせた。

確かにこれ迄に少しずつ分かって来た事もあるが、依然アンブロシアは封じの呪具なしでは手当たり次第に周りの物を消し去ってしまう事に代わりはなく、その力は年々強くなっていつている。

ディオルカとの約束のためにも、どうにかしたいと思っているが近年また新たな問題が浮上してきた。

それが隣国達との問題だ。なかなか開国を認めない王に痺れを切らして近年、大掛かりな攻撃を仕掛けてくるが多くなって来たのだ。それだけでなく、アンブロシアの力が強くなるにつれ、父の力は弱まって行き丁度国との境目に位置する北の領土から、守りの障壁の隙について他の大陸から出入りしているものが増え、色々と問題が起き始めている。

俺は実際の所、父王や古くからの重鎮達のようにまったく国交を結ばないという姿勢には反対している。ここ数十年の出産率を考えても新しい血が必要だ。まだ民間レベルではそこまで影響はでないが、血族婚を繰り返す王族や貴族は特に言う迄もなく・・・だが、確かに開国にはいくつかの問題点も多くあるのは事実だ。

彼らは我らの知識だけでなく全てを欲している。特に貪欲な国が北に位置するソルディンというここ200年ぐらいに出来た新興国だ。この話はまた次回ゆっくりと話そう。お前の意見も聞きたい。

なにしろ俺は次期このアルティマイナの王として国民全てを守る義務がある。だが一人の父としてアンブロシアの幸せを願う心もある。

る。しかし、今のままもつとアンブロシアの力が強くなり、それが私たちのコントロールできないほどのものになったとしたら、私は国を守る為に決断しなければいけない・・・それがデイオルカとの約束を破る事になってる。

――――
――――
――――

思いもよらない王子の過去と今抱える深刻な悩みを聞き、桜華はとっさに言葉がでてこなかった。

つまり、このままアンブロシアの力が解明されない限り、近い将来もしかしたら王子は自分の子を殺さなくてはならない状況に陥る可能性があると言う事を理解したからだ。

そんな事は・・・許されない、いや、許したくない。だが、じゃあどうするのだと問われても今の桜華は王子同様何もすることができないのだ。それでも何か、どうにかすることができないのかと、王子と別れたあと、桜華は部屋に籠り思考を続けていた。

もしかしたら、古代の書に何かヒントが隠されているかもしれないと考えつき、明け方まで読みふけていた桜華は疲れて眠りにつき、そしてあるゆめを見たのだった。

Side千早　（手がかり2）

体が重い・・・沈み込んで行くような感覚・・・ああ、これはいつものゆめだ・・・

神経を研ぎすまさせて目を開くと眼下に見えたものは今までにどんな映像や本でも見た事のない巨大で優美な宮殿だった。大理石の柱が何本も続き、また白亜の建築物が周りの緑と美しく呼応している。しばらくの間、その美しさに目を奪われそしてすぐに思い至った。これは姉がいなくなる前の晩、半年前に見た世界なのだと・・・。すぐにでも姉を捜しに行きたいが、自分にはゆめをコントロールする事が出来ない。それが見せるものをただ受け止める事しかできない自分に苛立を覚える。

ふと次の瞬間からだがり寄せられるようにその巨大な宮殿の一室へと向かう。

その部屋はその白く美しい宮殿とは対照に黒っぽい重厚な家具と訳の分からない品物で溢れていた。

ふと視線を感じて振り向くと奥の厚手のカーテンの向こうに誰かがいる・・・美しく黒い髪・・・まさか?! だがその人物は前髪を長く垂らしていて表情が伺えない。姉とは違うと落胆したがその次の瞬間思いもしない出来事が待っていた。

「・・・あなた・・・誰?」まっすぐに自分に向かって歩いて来た人物の隠された前髪の奥の瞳が確かに自分を捕らえていた。まさか自分が見えるのか・・・? しかも彼女が喋っている言葉は分からないにも関わらず、直接心に語りかける様に相手の言葉が理解できた。

「俺が見えるのか?」今迄幾度となく夢見をしてきたが異界らしき

地でまさかこんな状態で話しかけられるなどと思いもよらなかった。
・

「見えるわ。でもこんなはつきりとした思念体を見るのは初めてね。このアルティマイナの民では無いようだし……。とても興味深いわ……。ねえ、貴方はどうして此処へ来たの？」

部屋の中に見知らぬ男、しかも半ば霊化している自分を見ても驚く事無く淡々と述べる人物に興味を覚えつつ長い前髪の奥に隠された美しい翡翠の瞳に目を奪われた。

「どうして……。か、それは自分でも分からない。昔から良く「ゆめ」を見て来たけど……。此処に来たのは、いやこの世界に来たのは2回目だ。俺の事が見える人に出会ったのは初めてだから、本当ならもっとゆつくりしたい所だけど、いつこのゆめから醒めるのか分からないから探しに行かないと……」

「探しに？何を？」その人物はゆつくりと首を傾げながらなお不思議そうに自分を見つめたまま問いかける。

「姉さんを……。きつとこの世界にいる。それは確かに感じられるんだ。桜華姉さんっ！」

次の瞬間目の前にいた黒髪の少女はわかったとばかりに大きく頷いた。

「ああ、だからなのね。貴方、あの人の姉弟なのね。何処かで見たと思ったら……。」

「姉を知っているのですか?!」

「ふふ、知っているわ。だって今この王宮で最も話題に登る人物で

すもの。あの王子の思い人・・・そうでしょう？」

「そうでしょうって・・・一体どういう？」 目前の不思議な人物の言葉を頭の中で反芻しながらその言葉の持つ意味を考える・・・彼女は何と言った？ 王宮・・・王子？！

「あら、何も知らないの？ ポリヒュムニア候が養子に迎えた、次期アルティマイナの王アクロティヌスの妃候補としてこの宮殿に来た娘は今や王子の心を掴んで虜にしているというもっぱらの噂、私はどうでも良いのだけど、私のお父様や他の諸候には面白くないよ。うね・・・でも王子のお心はきつともう決まっているわ。」 そう言いながら娘はつまらなさそうに手に持っていた扇をパチンと閉めた。

「は・・・？」 姉が妃候補？ 何の冗談だと思いつつ、いつか見たゆめに出て来た姉を見つめていた男の事を思い出した。

「その話、もっと詳しく聞かせてくれないか？」

「良いわ・・・貴方が私の退屈しのぎになってくれるのなら。でも、貴方・・・あまり長くその思念体でいるのは止めた方が良いわよ？ とても体に負担がかかるもの・・・。そうね、貴方が私の相手をしてくれるなら、良いものを差し上げるわ。きつと役に立つわよ？ そうそう、それから貴方のお名前はなんて言うのかしら・・・？ 私は・・・クロエ、古の王家の血、呪術と医術を受け継ぐ一族。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3186q/>

アルティマイナ

2011年10月31日15時22分発行